

ヒグマ捕獲テキスト

北海道環境生活部環境局

自然環境課

目 次

I	はじめに	1
1	本書の目的	1
2	ヒグマの生態	2
	(1) ヒグマの概要	2
	(2) ヒグマの痕跡	6
3	ヒグマと人の関わり	10
	(1) ヒグマ対策の変遷	10
	(2) ヒグマの捕獲数	11
	(3) ヒグマによる被害	12
4	ヒグマの捕獲区分	14
	(1) 狩猟による捕獲	14
	(2) 有害鳥獣捕獲による捕獲	14
	(3) 有害鳥獣捕獲における狩猟者の役割	14
II	捕獲技術編	16
1	事前調査	16
	(1) 出没状況の把握と対応策の決定	16
	(2) 防除技術	18
	(3) 捕獲方法の選択	21
2	銃器による捕獲	22
	(1) 捕獲にあたっての心構え	22
	(2) 道具について	23
	(3) 狩猟での捕獲技術	26
	(4) 有害鳥獣捕獲での捕獲技術	33
	(5) ヒグマの狙い方	37
	(6) 半矢のヒグマへの対応	44
	(7) 注意すべきヒグマの生態	47

3	箱わなによる捕獲	49
(1)	箱わなの構造	49
(2)	箱わなの設置例	56
(3)	箱わなの設置時の工夫	58
(4)	箱わなの餌	62
(5)	箱わなの見回りと止めさし	66
(6)	箱わなでの失敗例や危険な事例	67
4	くくりわなによる捕獲	68
(1)	くくりわなの使用にあたっての注意	68
(2)	くくりわなの構造	69
(3)	くくりわなの設置例	72
(4)	くくりわな設置時の工夫	76
(5)	くくりわなの見回りと止めさし	80
(6)	くくりわなでの失敗例や危険な事例	81
5	捕獲後の処理	82
(1)	解体方法	82
(2)	捕獲の報告と試料の提出	83
(3)	製品化と登録	87
	協力者一覧	88

ヒグマ捕獲テキスト

はじめに

1 本書の目的

ヒグマは北海道を代表する大型野生動物であり、北海道の豊かな自然の象徴でもあります。

一方、狩猟者にとってもヒグマは関わりの深い動物で、エゾシカと並んで北海道を代表する大型の狩猟鳥獣です。また、地域によっては農業被害や人里への出没など、ヒグマが人間生活に被害を与えることがあり、狩猟者がその専門的な技術を生かし、ヒグマへの対応を求められることがあります。

ヒグマへの対応には危険を伴うと同時に、その生態や習性を熟知するなど、高い技術と経験が必要とされますが、近年狩猟者の減少や高齢化が急速に進んでおり、特にヒグマの捕獲に対応できる人材が少なくなっています。

こうした状況を踏まえ、本書ではヒグマに対応する技術や経験を伝承することを目的として、各地の捕獲熟練者からの聞き取りで得られたヒグマの捕獲技術を中心に、ヒグマ出没時の対応方法や最新の防除技術なども交えて、ヒグマに対応する際に役立つ情報を幅広く収録しています。これからヒグマの捕獲に携わる狩猟者の方々が捕獲技術を身につける際の参考として、活用していただければ幸いです。



ヒグマによるデントコーン畑の被害と巡回

2 ヒグマの生態

(1) ヒグマの概要

ア 分類と学名

食肉目 クマ科 ヒグマ属

Ursus arctos

イ 分布

北アメリカ北西部、スカンジナビアからロシア東部、シリアからヒマラヤまで広く分布しており、ヨーロッパの山脈にも孤立した個体群が分布しています。日本とその周辺では、北海道、国後島、択捉島、サハリン、中国東北部に分布し、このうち北海道は極東地域における南限になります。

ウ 形態

毛色は個体によって違いがありますが、黒色や褐色のものが多く、金毛や銀毛が混じるものや、胸に白い三日月型の模様が入るものもいます。体重は、オスで150～400(＊)kg、メスで60～120kg程度になり、日本に生息する最大の陸上動物です。

＊：2002年11月斜里町にて捕獲(実測値)

毛の模様の違い(白斑のある個体)



ヒグマには、希に胸から首にかけて白斑のある個体が存在します。

エ 生態

耳や鼻の感覚はとても鋭敏ですが、目はあまりよくないようです。身体能力は優れており、時速50km程度の早さで走ることができます。小さな個体であれば簡単に木にも登ります。

基本的には単独で生活しますが、子どもは生まれてから、1年半から2年半を母親と一緒に過ごします。ときおり、親から離れた後に、兄弟が一緒

に行動していることもあります。

季節ごとに採食するものが変わり、食物条件により移動と定着を繰り返します。

行動圏(＊)はオス同士、メス同士、オスとメスの間で重複しています。また、季節ごとに採食するものが変わり、食物条件によって移動と定着を繰り返します。

メスは何年にもわたって一定の範囲で暮らし、行動圏は数平方kmから数十平方kmであるのに対して、オスは広い範囲で動き回り行動圏は数百平方kmに及ぶと考えられます。

＊行動圏：動物が生活するために行動する範囲のこと。

オ 繁殖と冬眠：

交尾期は5月下旬から7月上旬で、妊娠したメスは翌年の1月下旬から2月にかけて1～3頭の子を冬眠穴の中で出産します。メスは満4歳で出産が可能です。5歳以下の初産の子育ては失敗することが多いようです。

冬眠期間は12月から4月に及びますが、その年の気候や地域の状況によって異なります。一般に妊娠しているメスは早めに冬眠穴に入り、また活動を開始する時期も最も遅いのに対し、オスは遅くまで活動して冬眠明けの時期も早い傾向があります。また、若い個体は成獣と比較して活動開始時期が早いようです。一般に秋の主要な食物である果実類が凶作の年には冬眠に入る時期が早まり、豊作の年には遅くなる傾向があると考えられています。

冬眠穴（左：外部、右：内部の様子）



カ 食物

基本的には植物食の強い雑食性で、季節ごとに採食するものは変化します。ただし、近年、道東地域を中心にエゾシカを採食する事例も増えてきています。

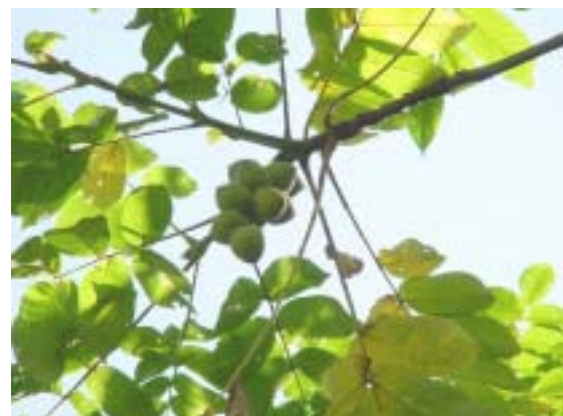
春：ザゼンソウ、イラクサ、セリ科のエゾニュウやアマニュウ、フキなどの多汁質の草本、前年に落果したミズナラなどの実(ドングリ)、越冬に失敗したエゾシカの死体。

夏：セリ科の草本、フキなどの多汁質の草本。シウリザクラやヤマグワなどの果実、アリ、ザリガニ。

秋：オニグルミ、ミズナラ、サルナシ(コクワ)、マタタビやヤマブドウなどの果実。

大雪山や日高山脈などの標高の高い地域では、ハイマツやコケモモなどの果実も利用。

ヒグマの食物(左上：ザゼンソウ、右上：フキ、左下：ザリガニ、右下：オニグルミ)



キ 法律等による取扱

日本の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブック(環境庁 1991)

～ 地域個体群(保護に留意すべき地域個体群)

：石狩西部のエゾヒグマ個体群

北海道の希少野生生物 北海道レッドデータブック2001

～ 地域個体群(保護に留意すべき地域個体群)

：積丹・恵庭(石狩西部)のヒグマ個体群、天塩・増毛のヒグマ個体群

鳥獣の保護及び狩猟の適正化に関する法律

～ 狩猟鳥獣

絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律

～ 国際希少野生動植物種(輸出入及び国内における譲渡し等の規制)

絶滅のおそれのある野生動植物の種の国際取引に関する条約

(通称：ワシントン条約、CITES)

～ 付属書 (輸出には政府発行の許可が必要)

(2) ヒグマの痕跡

ア 足跡

ヒグマは前足と後足で形状が異なります。野外では前足の足跡、特に肉球（パット）の部分が残りがすくなります。指の数は前後とも5本です。普通に歩いたときの足跡では、前足の前に後足の跡が残ります。

一般的に道内では、前足の幅が14cm（道南では13cm）を超える個体は、オスである可能性が高くなります（P.17 参照）。ただし、地面の固さや足のつき方によって、足跡の残り方は微妙に違ってきますので注意が必要です。

前足（右）



後ろ足（右）



前足（下）と後ろ足（上）



歩いたときの足跡



雪の上の足跡



イ フン

基本的には太い俵型をしています。食べているものや時間の経過によって形状も変化します。また、ヒグマは消化があまりよくないため、食べたものがそのままの形で出てくることが多いのも特徴です。

草本



サルナシ(コクワ)



オニグルミの実



ミズナラ(どんぐり)



ウ 食痕

ヒグマが餌を採食するとさまざまな跡が残ります。これらを覚えておくことでヒグマがどのような餌を食べているのかを判断することができます。

アマニュウ食痕

根元を食べています



フキ食痕

うまく噛み切れずに一部つながっています



アリ食痕

枯れ木の根元を掘り起こした跡



ミズキの実の食痕

木に登って枝を折った跡



エ 爪跡

爪跡はヒグマが自分の存在を主張するためにマーキングとして残す場合や、ヤマブドウなどのつる植物を採取するために木に登り下りした際に残る場合があります。

爪跡



3. ヒグマと人の関わり

(1) ヒグマ対策の変遷

ヒグマは北海道の自然の豊かさを代表する大型哺乳類ですが、ヒグマによる被害は開拓以前の蝦夷地の時代からあり、開拓期以降も人家への襲撃や悲惨な人身被害等が頻発し、危険な害獣として恐れられ、その対策として捕獲が行われてきました。

北海道では、昭和37年の大冷害等の影響によって、ヒグマによる人身・家畜及び農作物に甚大な被害が生じたため、翌38年度に「ヒグマ捕獲奨励事業」を開始して捕獲を推進し、昭和54年度まで継続して行いました。

昭和41年度からは、ヒグマの生息数を積極的に減少させることを目的とした「春グマ駆除」制度を開始しました。春先は草木が繁茂する夏以降に比べて見通しがよく、また、積雪があることから足跡の追跡もしやすいため、地域によってはヒグマの絶滅が心配される状況となり、平成2年度に中止しました。

また、平成12年度に「渡島半島地域ヒグマ保護管理計画」を策定し、人身事故の防止、農作物等被害の予防及び地域個体群としての存続を図るため、駆除のみに頼らない予防対策を実施し、人との軋轢を軽減することを目指しています。

ヒグマ対策の経緯

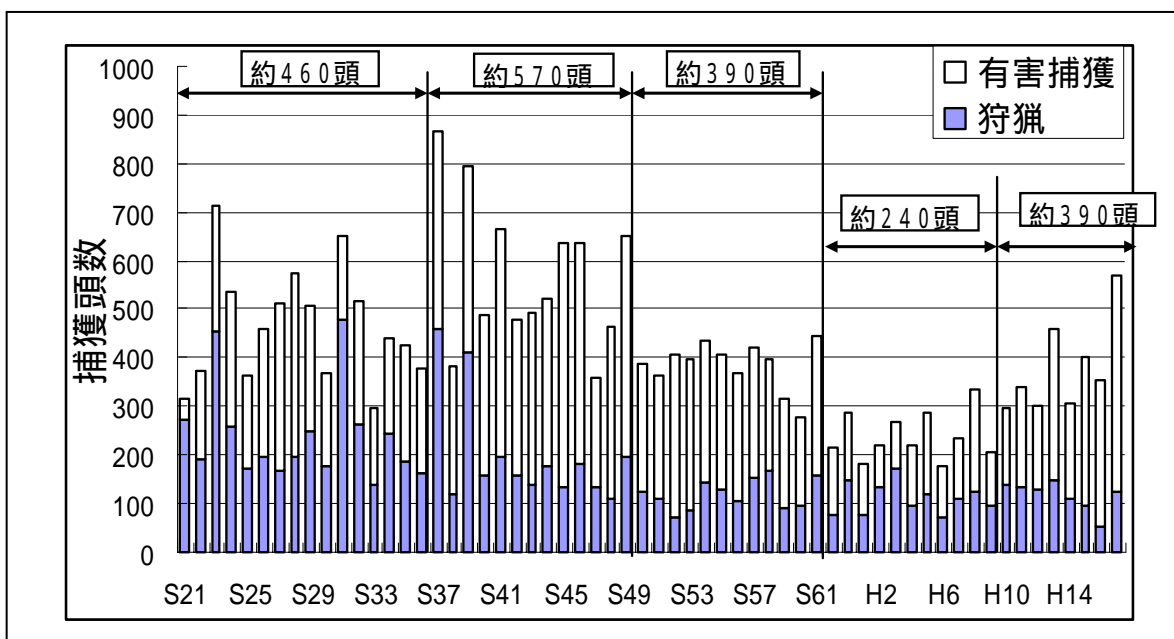
年 度	制 度	目 的
明治6年	鳥獣猟規則制定	
明治25年	狩猟規則制定	(保護鳥獣を規定:ヒグマは対象外)
明治28年	狩猟法制定	
大正7年	狩猟法改定	(狩猟鳥獣を規定:ヒグマも対象)
昭和38年	狩猟法を鳥獣保護及狩猟ニ関スル法律に改名 ヒグマ捕獲奨励事業を開始	ヒグマ捕獲の奨励
昭和41年	春グマ駆除を開始	ヒグマ生息数の減少
昭和51年	「春グマ駆除指針」の策定	
昭和55年	ヒグマ捕獲奨励事業を廃止	
昭和58年	ヒグマ生息実態調査を開始	ヒグマの生息実態の把握
平成2年	春グマ駆除を廃止	絶滅の回避
平成4年	大日本猟友会による捕獲自主規制(3年間)	捕獲頭数の管理
平成12年	渡島半島地域ヒグマ保護管理計画の策定	(軋轢の軽減と地域個体群の存続)
平成14年	渡島半島地域で「春季の管理捕獲」を試行	被害の防止と絶滅の回避
平成15年	鳥獣保護及び狩猟の適正化に関する法律施行	
平成17年	渡島半島地域で「人材育成のための捕獲」を実施	ヒグマ捕獲従事者の減少対策

(2) ヒグマの捕獲数

北海道におけるヒグマの捕獲数は、昭和21年度から36年度までは約460頭、37年度から49年度までは約570頭、50年度から61年度までは約390頭、62年度から平成9年度までは約240頭、10年度以降は390頭程度で推移しています。

また、昭和50年代以降、狩猟による捕獲頭数は100頭前後でほぼ一定であるのに対し、有害鳥獣捕獲による捕獲数が増減を繰り返しています。

ヒグマの捕獲数の推移



(3) ヒグマによる被害

ア 人身事故

平成元年度から17年度の間が発生したヒグマによる人身事故は30件で、そのうち、死亡事故が8件(8名)、負傷事故が22件(25名)になります。

また、このうち狩猟者が関係している人身事故は15件で、全体のほぼ半数を占めており、これらの事故の多くは、撃って逃げたヒグマ、いわゆる半矢の追跡に失敗して反撃される場合や、きちんと死亡を確認しないままヒグマに近づいて反撃される場合がほとんどであり、慎重に対応することで防げる場合も多いと考えられます。

ヒグマによる人身事故一覧(平成元年度～17年度)

年度	発生年月日	発生地		作業目的	被害者の性別・年齢	負傷の程度	ヒグマの状況	備考
		支庁	市町村					
元	1989 11 15	十勝	広尾町	シカ狩猟	男 5 1 才	重傷	雌 5～6 才	2 頭子連れ
	1989 11 25	釧路	弟子屈町	シカ狩猟	男 4 0 才	重傷	雌	2 頭子連れ
	1990 3 7	空知	芦別市	林内作業	男 5 2 才	軽傷		穴から飛び出してきた
3 件				負傷 3 名				
2	1990 9 21	渡島	森町	山菜採り	男 7 5 才	死亡	雄 7 才	
	1990 10 21	檜山	上ノ国町	生け花用木採取	男 8 5 才	死亡		
	1990 10 29	網走	紋別市	クマ狩猟	男 5 4 才	負傷		
3 件				死亡 2 名 負傷 1 名				
3	1991 5 12	檜山	上ノ国町	山菜採り	男 5 8 才	負傷		
1 件				負傷 1 名				
4	1992 11 17	網走	遠軽町	林内作業	男 5 4 才	負傷	3～4 才位	
1 件				負傷 1 名				
5	1993 10 2	渡島	上磯町	狩猟	男 7 7 才	負傷		
1 件				負傷 1 名				
6	1995 2 13	網走	紋別市	林内作業	男 5 1 才	負傷	4～5 才位	冬眠中のクマ
1 件				負傷 1 名				
8	1996 6 2	網走	紋別市	山菜採り	男 6 0 才	重傷	子連れ	
1 件				負傷 1 名				
9	1997 8 24	網走	滝上町	クマ駆除	男 6 6 才	重傷	7 才	手負いクマ
1 件				負傷 1 名				
10	1998 11 23	十勝	新得町	シカ狩猟	男 5 1 才	負傷	雌	
	1998 11 23	釧路	白糠町	シカ狩猟	男 4 4 才	負傷	雄 7～8 才	
2 件				負傷 2 名				
11	1999 5 8	渡島	木古内町	川釣り	男 4 7 才	死亡	雄 2 才	同一クマによる事故
	1999 5 11	渡島	木古内町	山菜採り	女 3 9 才	負傷		
					女 5 0 才	負傷		
	1999 10 10	胆振	登別市	キノコ採り	男 3 1 才	軽傷		
	1999 10 31	釧路	音別町	クマ狩猟	男 6 4 才	重傷	雄 3 才	
1999 12 19	網走	紋別市	クマ狩猟	男 5 8 才	軽傷	雄 6 才		
5 件				死亡 1 名 負傷 5 名				
12	2000 11 1	釧路	白糠町	シカ狩猟	男 6 0 才	重傷	雌 4～5 才	子連れ
	2000 11 12	日高	平取町	シカ狩猟	男 7 3 才	死亡		
2 件				死亡 1 名 負傷 1 名				
13	2001 4 18	釧路	白糠町	山菜採り	女 4 2 才	死亡		子連れ
	2001 4 30	留萌	遠別町	山菜採り	男 7 0 才	重傷		
	2001 5 7	石狩	札幌市	山菜採り	男 5 3 才	死亡	雄 8～10 才	
	2001 5 10	日高	門別町	クマ駆除	男 8 1 才	死亡		
4 件				死亡 3 名 負傷 1 名				
14	2002 8 26	上川	南富良野町	畑見回り	男 7 8 才	軽傷		
1 件				負傷 1 名				
15	2003 11 14	胆振	苫小牧市	クマ駆除	男 6 4 才	軽傷	雄 2～3 才	
1 件				負傷 1 名				
16	2004 11 26	日高	新冠町	クマ狩猟 (送電線護衛)	男 6 7 才	重傷	親子	
					男 6 5 才	軽傷	雌 6 才	
1 件				負傷 2 名				
17	2005 9 24	釧路	白糠町	キノコ取り	男 7 4 才	死亡	親子	
	2005 10 4	胆振	穂別町	狩猟中	男 5 8 才	重傷	雌	
				男 7 1 才	軽傷			
2 件				死亡 1 名 負傷 2 名				

イ 農業被害

農業等被害については下記のとおり、全道で毎年1億円前後の被害が生じています。ヒグマは雑食性なので農作物から家畜まで、被害の対象は様々です。それまで被害を受けていない作物でも、ある年から急に被害が発生することがあります。また、一度被害を受けた土地では同様の被害が続く傾向があります。一般的に、被害は農作物の収穫期に発生しますが、ヒグマが被害を及ぼす前に作物の生育具合を偵察にやってくることもあります。

ヒグマによる農業被害の内訳：平成14年度～16年度の平均

単位：千円

年平均被害総額	トウキビ類	ビート	果菜類	米麦類	養蜂	果樹類	その他
115,074	61,919	22,401	7,474	4,857	2,154	1,046	15,223

*この他に、被害金額が算出できなかったものもあります。

農業被害で最も被害額が大きいのは、トウキビ類(デントコーン・スイートコーン)で、次いでビート、果菜類(スイカ・メロン等)の順になります。

農作物被害

デントコーン被害



ビート被害



スイカ被害



養蜂被害



4 ヒグマの捕獲区分

狩猟者が主に関係するヒグマの捕獲には、狩猟と有害鳥獣捕獲の2つがあり、それぞれに目的や期間、実施の形態が異なります。特に有害鳥獣捕獲の制度については、一般の狩猟者にとってなじみの薄いものですが、この機会にその仕組みについても理解を深めておきましょう。

(1) 狩猟による捕獲

ヒグマは狩猟鳥獣に指定されていますので、狩猟者登録を受けた人であれば、狩猟期間中（10月1日から翌年1月31日まで）に捕獲を行うことができます。ただし、捕獲方法は銃器のみに限られ、わなによる捕獲は禁止されています。

(2) 有害鳥獣捕獲による捕獲

有害鳥獣捕獲は被害等の防止を目的として行われるもので、原則として被害が発生している期間に実施します。捕獲許可を受けられるのは、

- ・ 国、地方公共団体
- ・ 農業協同組合や森林組合など法で定められた法人
- ・ 被害者又は被害者から依頼を受けた者

になります。

ヒグマを捕獲する制度

	狩猟	有害鳥獣捕獲
目的	狩猟行為（捕獲）	被害等の防止
行為の形態	登録制	許可制
捕獲を行える者又は許可を受けられる者	狩猟免許所持者	・ 国、地方公共団体 ・ 法人（法で定められたもの） ・ 被害者等
捕獲実施者	狩猟者登録者	被許可者または従事者
捕獲できる期間	狩猟期間（10/1～1/31）	必要と認められた期間
実施の方法	銃器	銃器、わな

(3) 有害鳥獣捕獲における狩猟者の役割

実際にヒグマが出没した場合の対応では、各市町村が、それぞれに定めた要綱等に基づき、情報収集や対応方針の決定、関係機関との連絡調整など、さまざまな対応を関係機関と連携しながら実施しています（次頁フロー図参照）。

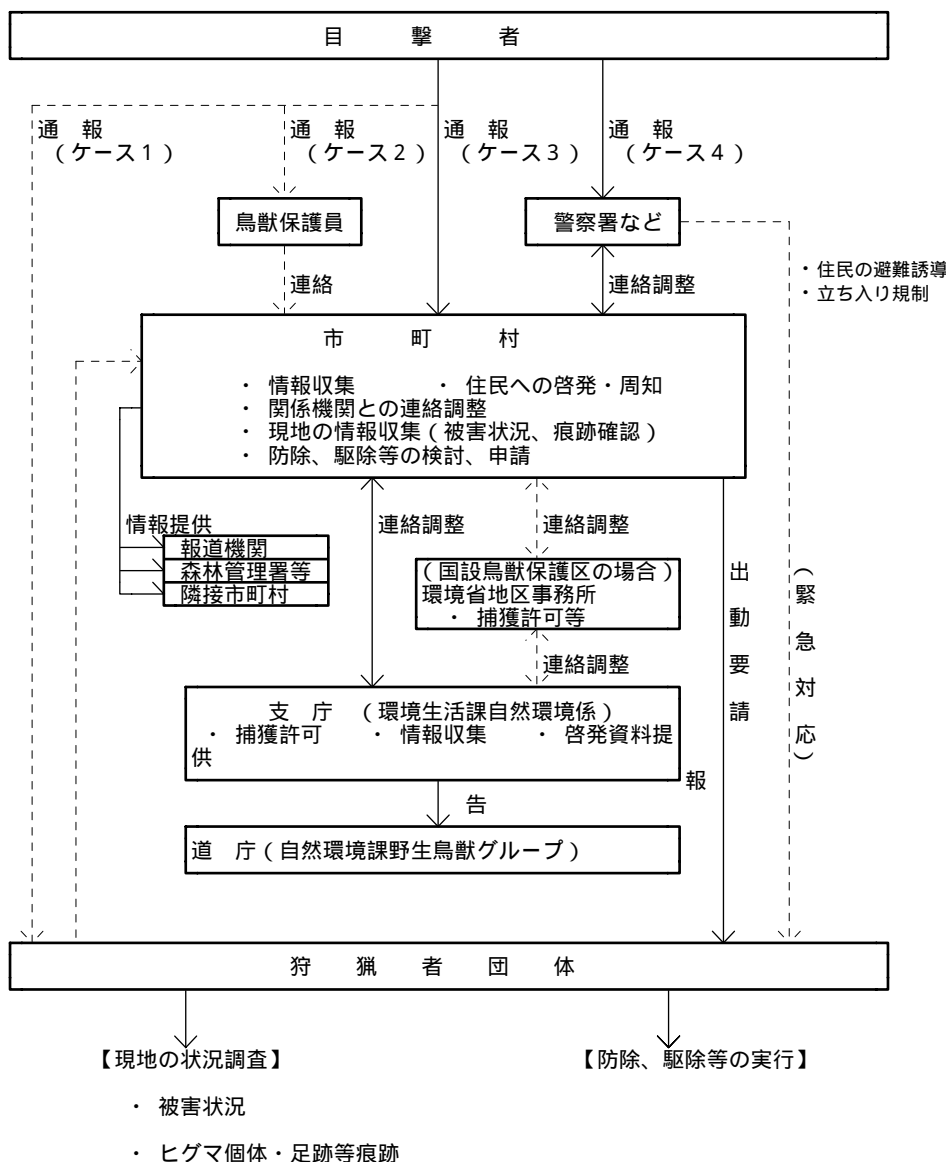
狩猟者については、従事者として有害鳥獣捕獲に参加し、出没状況の調査や防除・捕獲作業の実施が主な役割になりますが、それら以外にも、対応方針の決定や住民への普

及啓発まで、さまざまな場面でヒグマへの対応に関わる機会が出てきます。そのため、捕獲についての知識や経験だけでなく、ヒグマの生態や防除手段など、日頃からヒグマについての幅広い見識を身につけておくことが大切です。

また、ヒグマの有害鳥獣捕獲には緊急性や危険を伴うことが多いため、その対応には大きな負担を強いられることがあります。しかし現状の市町村などの行政機関には、ヒグマに対して専門的に対応できる人材がほとんどいないため、その多くを狩猟者に頼らざるえない状況です。

今後はこうした状況を改善していくことも必要ですが、狩猟者としても地域社会に果たす重要な社会的責務の一つとして、高い意識を持って有害鳥獣捕獲に協力していくことが望まれます。

【 ヒグマ出没時における対応フロー（標準例） 】



捕獲技術編

1. 事前調査

(1) 出没状況の把握と対応策の決定

ヒグマに関する何らかの情報が通報された場合、速やかに現地調査を実施して、出没の原因や問題点を明らかにすることが重要です。これはヒグマ対応の最も基本となる部分であり、その後の対応を方向付けるものですから、迅速かつ確実に実施することが大切です。

現地調査で留意すべき事項

- ヒグマを誘引するものがないか
- ヒグマが現れやすい(隠れやすい)環境にないか
- ヒグマが人を警戒していたか
- 出没が繰り返し起こっていないか
- 出没しているヒグマは何頭か

出没原因や問題点の整理に続いて、出没しているヒグマが人への危害や農作物等に被害をもたらすなどの行動を示していないかどうか、すなわち問題グマであるかどうかの判断が必要です。

問題グマの定義(案)

- 人間への攻撃的な行動をした個体
- 人間への恐れを持たず、人前にたびたび姿を見せる個体
- ゴミなどの人為的な食べ物に餌付いていて、執着している個体
- 農作物や家畜等への顕著な食害があり、その後も被害を拡大する可能性が高い個体

この定義(案)に該当し、問題グマと判断される個体については、早急に次の対応策を検討する必要があります。それ以外の、例えば通りグマ等の場合には、引き続き情報収集と監視を行うことが必要です。

ヒグマへの対応で最も重要なことはヒグマによる人身事故を防止することです。そのため、この定義(案)の に該当する個体の中でも、人間に対して積極的に危害を加えようとする個体については、すみやかに捕殺に踏み切る必要があります。ただし、次のようなヒグマの行動は、必ずしも人間に対して積極的に危害を加えようとするものではありませんので、きちんと区別して判断をする必要があります。

- ・親子連れのヒグマが、子を守ろうとして攻撃、威嚇する。

- ・突然の人間との遭遇に驚いたヒグマが攻撃、威嚇する。
- ・人間のクマに対する挑発に反応して攻撃、威嚇する。

次に、この定義（案）の から に該当する個体については、各種防除対策での対応を検討します。具体的な対策としては、誘引物の除去、電気牧柵による被害防止、追払いなどがあります。特にゴミなどの人為的な食べ物に誘引されている場合には、ヒグマの出没が繰り返され、人間との間で事故が発生する恐れも高いので、できる限り除去で対応する必要があります。その他、具体的な防除対策については、代表的なものを次項に紹介していますので参照してください。

防除対策実施にかかわらず問題が解決しない場合、あるいは防除対策実施が困難な場合には捕獲を含めた対応を検討します。特に、家畜被害や農作物被害を引き起こし、人間の生活に著しい支障をきたしている場合には、地域社会の不安を取り除くためにも、問題個体を特定し、迅速に駆除を実施する必要があります。

メモ ~ 出没しているヒグマは何頭か ~

ヒグマは行動範囲が広い動物です。そのため、一頭のヒグマが広範囲にわたって、問題を起こすことがあります。また、その反対に、ヒグマにとって魅力的な餌がある場所では、狭い範囲に複数のヒグマが出没することもあります。

このようなときには、出没しているヒグマは何頭であるかを判断することが必要になります。それぞれの個体を区別することを「個体識別」と言いますが、ヒグマを個体識別するための最も手近な方法は、足跡の大きさを比較することです。野外では特に前足の足跡が残りやすいので、この幅を計測するのが一般的です。

親子のヒグマであれば、大小異なる足跡が残ります。また、例えば道南地域では、前足の幅が 13cm を超える場合は、ほぼオスの成獣であることが分かっています。

ヒグマを直接目撃した場合には、ヒグマの大きさや毛などの情報も個体識別の有効な材料になります。特に、人間への恐れを持たず、人前にたびたび姿を見せるようなヒグマについては、繰り返し目撃されることが多いので、このような情報を収集しておくといでしょう。

ヒグマの足跡 左：子の足跡（幅約 9cm） 右：オスの足跡（幅約 15cm）

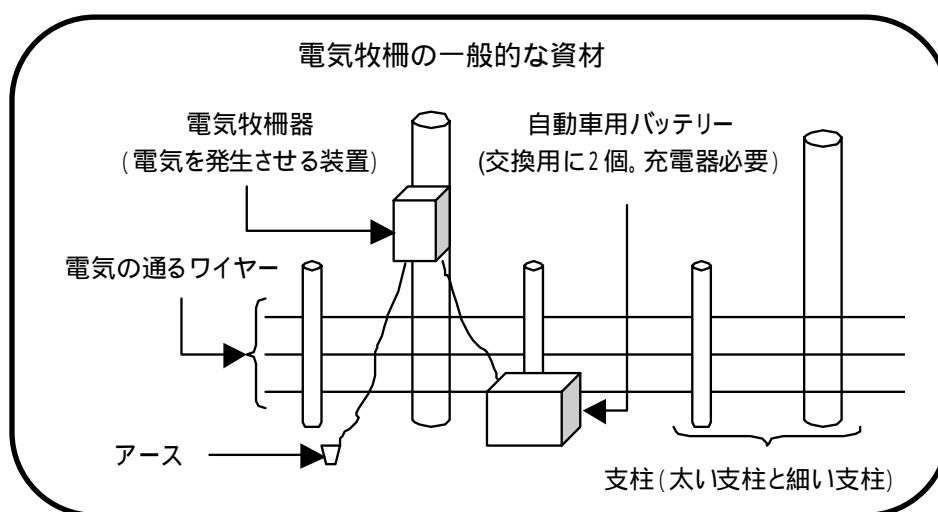


(2) 防除技術

現在ヒグマの防除対策として実施されているものを紹介します。状況に応じてこれらの防除対策を実施することで、捕獲だけではなく、幅広い対応が可能になります。

ア 電気牧柵

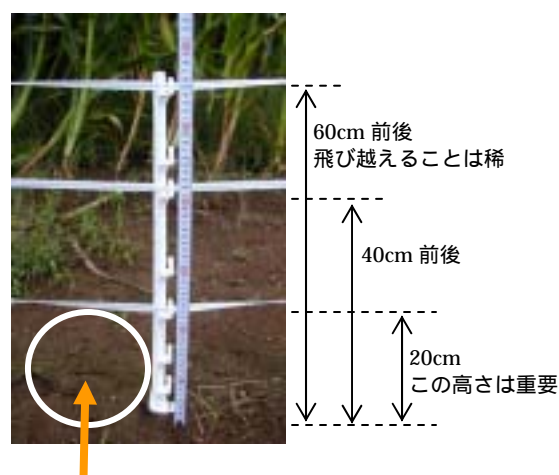
電気牧柵は農地の周りに電気を流したワイヤーを張り、電気の衝撃をヒグマに学習させることで農作物被害を防ぐものです。機材への初期投資や設置・維持管理の労力が必要ですが、農地への侵入を防ぐことで、被害を直接防止することができます。



電気牧柵の設置例 (デントコーン)



ヒグマ向けのワイヤー設置高



ヒグマはこの隙間を狙います。掘ることもあります。

イ 刈り払い

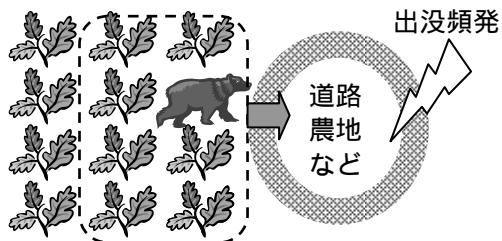
ヒグマが出没している場所の藪を刈り払うことで、ヒグマが身を隠せる場所をなくし、出没を抑制します。また、見通しのよい空間をつくることで、農作業を安心して行うことができる等、人間側にも心理的な安心感が生まれます。特に道路や林縁の農地などで効果が期待できます。さらに、捕獲を行うことになった場合にも、ある程度作業が容易になるという効果もあります。

刈り払い前

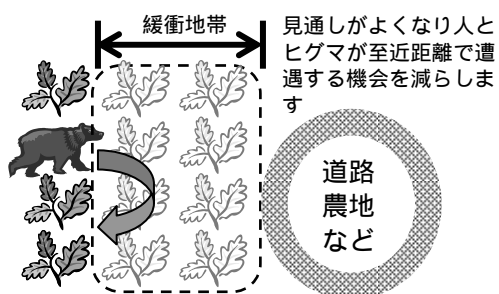


植生刈り払いの考え方

<刈り払い前>



<刈り払い後>



刈り払い後



イ 威嚇弾

ヒグマの出没対策として、追い払いを実施するときに使用します。

道内では知床国立公園などのヒグマ対策で活用されていますが、使用に当たっては有害鳥獣捕獲の許可が必要です。

ゴム弾は弾頭に硬質ゴムが使用されており、ヒグマの体に直接当てて追い払います。有効射程は30～40mで、筋肉の厚い下半身を狙います。

花火弾は発射された弾が音と光を出して爆発するものです。距離は70～80mまで使用可能で、対象個体よりも手前に着弾するように狙います。

どちらの弾も購入には有害鳥獣捕獲と弾の購入許可が必要です。弾を使用できる銃は12番のショットガン（スラッグ銃身）になります。さらに、弾の排莖と次弾の装填をスムーズに行えるという点でポンプアクションの銃が最も適しています。

エ その他

忌避材

野生鳥獣の被害防除用の資材で、ポリエチレン製の袋を風船のように膨らませて使用する忌避材が販売されています。袋が風に揺れて出る音や袋についた香りや色によって、動物に刺激を与え、侵入を防ぎます。

爆音器

プロパンガスにより、大きな爆発音が一定の間隔で発生します。ヒグマが爆音に驚くことで畑などに近づくことを防ぎます。

これら2つの対策については、長期間使用していると、ヒグマにも慣れが生じてきて、効果が薄まる可能性があります。農作物の被害では、収穫までの時間が短いときなど、限られた期間で使用するのが望ましいといえます。

忌避材



爆音器



威嚇弾

左からゴム弾、花火弾、実包



(3) 捕獲方法の選択

ヒグマが出没した場合には、まず現地の状況を確認することが必要ですが、ヒグマによる人身事故防止のため、銃器を携帯して確認作業を行うことが一般的です。そのため、市町村等では地元狩猟者を従事者とする、銃器によるヒグマの有害鳥獣捕獲の許可を取得します。

このように、ヒグマの有害鳥獣捕獲では、銃器を所持しての現地確認等が最初の対応となります。しかし、銃器による対応では次のような問題があるため、現状では箱わなに頼るケースが増えてきています。

- ・銃器による対応は捕獲の機会が限られており、捕殺に至るまでに高い技術が必要であること
- ・見通しが悪い状況での銃器による対応は危険を伴うこと
- ・夜間の出没に対しては銃器での対応が出来ないこと
- ・ヒグマに対応できる狩猟者が減少して、巻き狩り（P.31参照）の実施が困難であること

箱わなについては、銃器に比べると比較的安かつ容易に捕獲作業を行うことができますが、設置や見回りなどの労力がかかること、人の出入りがある場所での設置は危険であることなどの問題もあります。

さらに、次のような状況がある場合には、箱わなに加えてくくりわなの使用を検討する必要も出てきます。

- ・箱わなを設置しても、ヒグマが箱わなを覚えていて捕獲が難しい場合
- ・地形的な制約で箱わなを設置するのが困難な場合
- ・畑等で被害があり、出没経路が定まっており、かつ一般の人（山菜採り、魚釣りなど）が入らない場合。

このように、それぞれの捕獲方法には長所と短所がありますので、それらを十分考慮した上で、現場に最も適した捕獲方法を選択することが重要です。

2 銃器による捕獲

(1) 捕獲にあたっての心構え

この章では捕獲熟練者からの聞き取り調査をもとに、ヒグマを銃器で捕獲するための技術を紹介しています。ヒグマは他の動物と違い、その対応を一步間違えると生命の危険に関わることがあり、特に、銃器での捕獲はその危険性が高くなります。そのため、技術だけではなく、捕獲に携わる心構えも大切になってきます。ここでは、捕獲熟練者がヒグマを捕獲するときに大切にしている心構えを載せておきます。長年の経験の中で得られた技術や実績の裏には、こうした思いがあることを念頭に置いたうえで、その後の内容を読み進めてください。

【捕獲熟練者の意見】

- ・安全第一。決して無理をせず、条件が良いときを待つこと。
- ・捕獲に携わっているときは気をゆるめず、全神経を集中する。
- ・自分の自信がある条件のときに撃つ。ときには撃つのをやめる勇気も必要。
- ・クマの生態や習性を知ること。そのことで捕獲の機会が増え、危険も避けられる。
- ・恐怖心はよくない。冷静に対応できる度胸が必要。
- ・クマにも一頭一頭個性がある。決めつけてかからず、あらゆる状況に対応できるようにする。
- ・地形や自然の条件が違えば、クマの性質も違ってくる。
- ・クマの気持ちになる。

(2) 道具について

ア 銃器

ヒグマの捕獲では、ライフル銃を使用するのが一般的です。ただし、至近距離で遭遇する可能性がある場合やブッシュが濃くて跳弾しやすい場所では、散弾銃のほうが効果的なこともあります。最近では散弾銃でも、ハーフライフル銃身のように高い精度と威力を発揮し、ヒグマに対して十分に対応できるようになっているものもあります。

ライフル銃については、装填方式（ボルトアクション、自動など）や口径の違いによりさまざまな種類があります。銃の特性を理解した上で、使用する条件や自分に合ったものを選択することが大切です。

また、自分が使用する銃器については、射撃練習などを通して、取り扱いに十分習熟し、高い命中精度が発揮できるようにしておくことが最も重要です。

【捕獲熟練者の意見】

- ・ブッシュが多く見通しの効かない場所では、散弾銃を使用する。
- ・故障しにくく、装填時の音が小さい（ヒグマに気づかれにくい）のでボルトアクションを使用している。
- ・ボルトアクションの銃は慌てて操作すると弾が「かんでしまう」ことがあるので、落ち着いて操作する必要がある。
- ・自動銃でもきちんと整備していれば安全性は高い。
- ・ヒグマが近いときには装填が早いので自動銃がよい。
- ・口径が小さいライフルでもきちんと急所を狙えば、十分にヒグマを捕獲できる。
- ・軽くて持ち運びのよい銃がよい。
- ・ブッシュが濃いところでは銃身が短い方が扱いやすい。

イ 弾頭

現在、北海道では狩猟でヒグマを捕獲するときには、鉛弾の使用は禁止されています。ただし、有害鳥獣捕獲についてのみ、後述する指定猟法許可を申請することで鉛弾を使用することができます。

弾が命中したときの威力には、弾頭の貫通力とエキスパンション（命中した弾頭の広がりや散らばり具合）という2つの要素が関係してきます。貫通力が高く、エキスパンションが大きいほど獲物に与えるダメージは増しますが、これらの性能は弾頭の材質、形状、命中時の速度などによって異なってきます。

一般的に銅弾は、鉛弾に比べると材質が固いため、貫通力が高く、エキスパンションが小さくなります。貫通力が高いという点では、エゾシカなどに比べて骨や筋肉が丈夫なヒグマでは有利に働くこともあります。同じ銅弾でも、エキスパンションの性能を重視したものもあります。現在では銅弾もメーカーによっていろいろな種類があり（鳥獣捕獲技術テキスト p31 参照）、それぞれに弾頭の特徴が異なります。それらを理解した上で、自分が使用する条件に適合したものを選択することが大切です。

さらに、大切なことは弾頭によって、銃身とライフリングなど内部構造との間に相性があるということです。弾頭と銃の相性が悪い場合には、弾着がまとまらないこともあります。射撃練習を通して、自分が使用する銃と弾頭の相性があうかどうかを確かめた上で、使用することが最も重要です。

ウ 指定猟法

有害鳥獣捕獲の許可を受ける場合で、安全上に不安がある場合に限り、鉛弾の使用を申請することができます。申請の様式は次頁の通りです。

別記第4号様式（第4条関係）

年 月 日

北海道知事 様

申請者	住 所	〒 電話番号
	氏 名	印
	職 業	
	生年月日	年 月 日生

指 定 猟 法 許 可 申 請 書

鳥獣の保護及び狩猟の適正化に関する法律第15条第4項ただし書の規定により、指定猟法により鳥獣の捕獲等をする許可を受けたいので、次のとおり申請します。

指 定 猟 法 の 種 類	
指定猟法によらなければならない理由	
捕獲等をしようとする目的	
捕獲等をしようとする期間	年 月 日から 年 月 日まで
捕獲等をしようとする区域	
捕獲等をしようとする鳥獣の種類及び数量	
学術研究を目的として捕獲等をしようとする場合にあっては、研究の事項及び方法	
備 考	

注1 捕獲等をしようとする区域を明らかにした図面を添付すること。

2 氏名欄に署名した場合、押印を省略できます。

3 用紙の大きさは、日本工業規格A4とすること。

(3) 狩猟での捕獲技術

ア 居場所を判断する

狩猟でヒグマを捕獲するためには、猟場にする地域の山でヒグマがどのように暮らしているのかを知ることが大切です。例えば、秋にヒグマが好んで食べるサルナシ(コクワ)やヤマブドウなどのつる植物やミズナラなど堅果類が豊富にある場所は、ヒグマが餌を食べるために繰り返し訪れたり、あるいは休息のために周辺に滞在することがあります。このようにヒグマなど野生動物がよく利用する場所のことを「つき場」と呼びますが、こうしたつき場をたくさん覚えることがヒグマを捕獲するための第一歩になります。

次に、野生動物は移動のために頻繁に使用する道、いわゆる通り道(獣道)を持っています。通り道は周辺の地形、動物にとっての歩きやすさ、餌場との位置関係などから決まってくると考えられ、一頭のヒグマだけでなく、複数のヒグマが繰り返し利用するところもあります。

ヒグマはエゾシカなどに比べると生息数は格段に少なく、やみくもに山を歩いても遭遇の可能性はとても低いものです。そのため、遭遇の機会を増やすためには、こうした「つき場」や「通り道」をたくさん覚える必要があり、このことが「クマを獲るには山を知れ」と言われる所以でもあります。

ミズナラ林

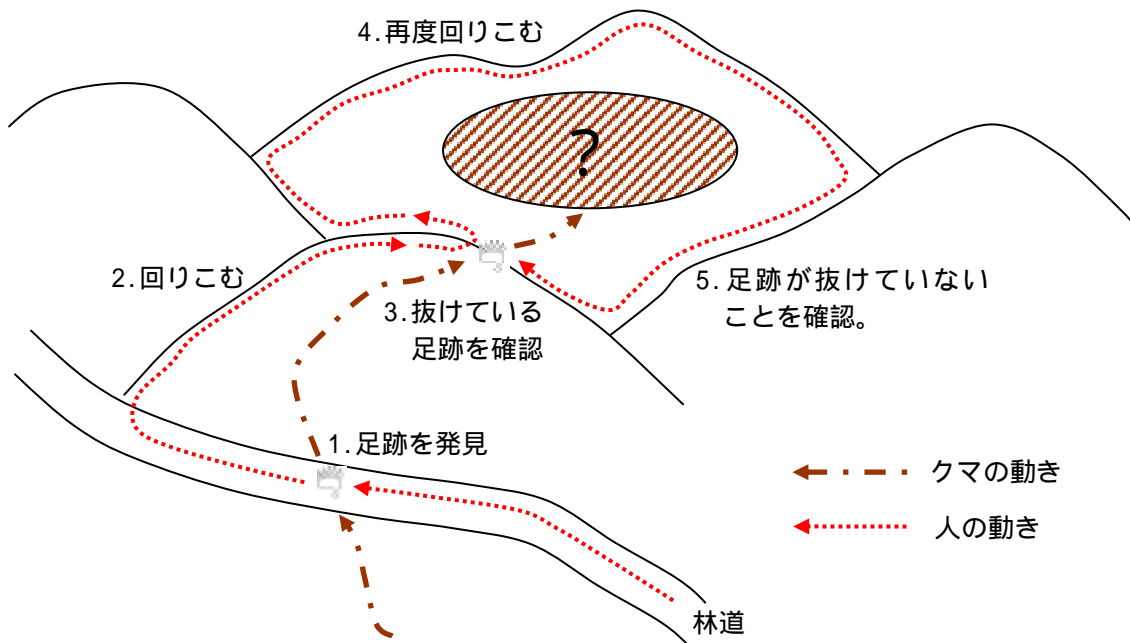


次に、ある程度猟場とする地域の山を覚えた後に、実際にヒグマの居場所をおさえることとなります。ヒグマの居場所をおさえることを「見切り」と言いますが、一般的には、雪がうっすらと積もり、足跡を追いやすくなったときが、ヒグマの見切りをするのに最も適した時期となります。

ヒグマを見切る典型的な方法は次の通りです。まず、できるだけ新しい足跡を見つけ、ヒグマがどの方向に向かっているのかを判断します。次に、ヒグマの足跡から離れ、ヒグマの向かっている方向に先回りかけをするようにして大きく回りこみます。このとき、回り込む距離が小さいとヒグマに気づかれてしまいますので、できるだけ大きく回るようにします。元の位置に戻るまでに、ヒグマが横切った跡がなければ、その歩いた周囲の中にヒグマがいることとなります。もしも途中で、ヒグマが横切った跡が見つかった場合には、さらにその場所を起点として、同じことを繰り返し、ヒグマがいる場所を絞りこみます。

山を覚えてくると足跡を見つけた段階で、ヒグマがどのつき場に向かっているのか、あるいはどの通り道を使うのかを予測することができ、より効率的にヒグマの居場所を見切れるようになります。しかし、そのような技術を身につけるまでには多くの経験が必要です。

見切りのイメージ図



【捕獲熟練者の意見】

- ・山（つき場と通り道）を覚えること。
- ・餌場になる場所を覚えておいて、時期になると見てまわる。
- ・足跡の向かっている方向で、行き先を見切る。通り道を覚えておいて、先回りする。
- ・クマも歩きやすいところを歩く。
- ・山の7合目あたりで、日当たりがよく風が当たらないような場所で休んでいることが多い。
- ・クマも逃げやすい場所で休む。
- ・人に追われた経験があるクマは、山の上のほうにいる傾向が強い。
- ・ササの倒れ方でクマが通ったかどうかを見分ける。シカの場合は跳ねて歩くので、ササのかえり方が違う。

イ 忍び獵

単独及び少人数で行う獵です。見切りをしてヒグマの居場所をつかんだところで、ヒグマに気づかれないように近づきます。ヒグマは音や臭いに敏感な動物ですので、音を立てないように静かに歩くことが基本になります。また、このときに最も重要なのは風向きです。音や臭いで気づかれないように風向きをみて、風下からヒグマに近づくようにします。

まずは足跡をそのまま追跡します。この段階でヒグマに追いつくこともありますが、ある程度近づいてきたら、ヒグマの行動を読み、つき場や通り道を先回りするほうがヒグマに警戒されにくく、近づける可能性が高くなります。

ヒグマの居場所に近づいたならば、自分の気配を消す（音をたてないなど）と同時に、ヒグマが近くにいないかどうか、周囲の気配に十分警戒しながら歩きます。決して急がず、少し歩いては周りを見るところを繰り返します。倒木や木の根元、ブッシュの陰などでは、ヒグマが休んでいることがありますので、一つ一つ確認します。追跡をしているときに止め足(47頁参照)を発見した場合は、一層の注意が必要です。また、子グマや小さなヒグマの場合は、木に登っていることもあるので、前だけでなく、木の上にも注意を払います。

次に、大切なのは常にヒグマより高い位置を保つようにすることです。具体的には、足跡を追跡する場合には、足跡を下に見るようにして歩き、先回りをする場合も尾根の上で待つように心がけます。高い位置にいるほうが、視野も広くなり、ヒグマの存在に早く気づきます。また、ヒグマに遭遇した場合や、発砲をする際の安全を確保することにもつながります。

【捕獲熟練者の意見】

- ・クマがいそうな餌場の見当がついたら、風向きに注意してクマより高い場所に移動する。
- ・足跡を確認しながら追跡する。追うよりも先回りするようにする。
- ・場所を把握したら、風をみる。常に風下から近づくようにする。
- ・足音を立てずに忍びで近づく。全神経を傾けて歩く。
- ・音を消すために靴を脱いで靴下で歩く。
- ・足跡よりも 20 - 30m 高い場所を歩く。
- ・近くなってきたと思ったら急ぎ足にならない。
- ・クマに近づいてくると独特のにおいがしてくる。
- ・風倒木や大木の近く、地形の低みに気をつける。隠れて寝ていたり、餌を食べていることがある。
- ・足跡を追跡するときは、前だけでなく周りにも気をつける。
- ・木の上にいることがあるので上にも気をつける。
- ・親子のときは上にも注意。子は驚いて木に登る。
- ・「走った跡があったら追うものではない。」
気づかれたクマに追いつくのは難しい。
- ・風が強かったり、荒れているときは忍びで近づきやすい。
- ・雪の後に晴れて、樹上から融けた雪が落ちるような日も音がまぎれるのでよい。
- ・クマが眠たくなってくると、足跡がふらつく。
寝そうな場所を探す。

ウ 巻き狩り猟

勢子と待ちに分かれ、勢子が追い出したヒグマを待ちが捕獲する方法です。グループで行動するので、全体を統率し、現場の状況を熟知したリーダーが必要です。メンバーはリーダーの指示に必ず従うようにします。巻き狩りでは仲間の連帯感が大切ですが、同時に危険も伴いますので、お互いに危険な行動を注意できる信頼関係が必要です。

猟場では、あらかじめ、見切り（ヒグマの居場所を確認）をしておくのが確実です。また、その際に、見切りをしながら、待ちの配置を決定します。ヒグマの場合は、追い上げる方法で巻き狩りをする 경우가多く、尾根上を中心に、ヒグマの通り道に待ちを配置します。ただし、風向きなどの状況によっては、風下に待ちを配置し、追い下げで行うこともあります。

待ちは、お互いに隣の位置を確認し、矢先の安全を確認します。その後は、決して無断では動かず、場所を動くときには必ず、周りの人に確認をします。配置についたならば、話をしたり、動いたりせず、気配を消して静かに待ちます。待ちの配置が終了したところで、勢子が追い出しを開始します。

勢子は、できるだけ目立つ服装を着用します。複数の勢子で追い出すときには、お互いの位置を確認しながら、慎重に追い出しをします。樹木が混み合ったところや見通しの悪いところでは、ヒグマが隠れていることもありますので、周りに十分気を配ります。普通は、勢子が音や声を立てながら追い出しをしますが、忍びも兼ねて静かに歩く方法もあります。この場合は、待ちの場所に近づいてきたら、音を出して位置を知らせるようにします。

待ちは、勢子とヒグマを間違えないように、ヒグマの姿をきちんと確認してから銃を構えるようにします。勢子も発砲音が聞こえたならば、銃を構えて止まり、待ちに撃たれたヒグマが戻ってくる場合に備えます。発砲があっても、指示があるまでは、待ちと勢子は、それぞれの持ち場を離れたり、無断で動いてはいけません。待ち解除の連絡を受けたならば、速やかに脱包して集合します。

【捕獲熟練者の意見 2-1】

- ・巻き狩りをしようとするところにクマがいるかどうかの確認が重要。クマに気づかれないように見切りをする。リーダーの指示に従うことが大切。
勢子は目立つ服装と声を出すことを忘れない。
待ちは、矢先に十分注意する。複数の待ちがいる場合には、隣の待ちの上のクマは絶対に撃たない。
(続く)

【捕獲熟練者の意見 2-2】

(続き)

- ・クマは追い上げ、シカは追い下げる。勢子は複数で音を立てながら歩く。待ちは木を後ろにして決して動かない。動かすのは目だけにする。
- ・よく通る場所の近くに待ちを配置する。シカに比べて待ちを大きく配置する。勢子は発砲音がしたら銃を構えて動かない。クマが戻ってくることがある。無線機をうまく使う。リーダーを1人にする。
- ・少人数(2-3人)で実施する。
クマの通り道を把握して、一人が足跡を忍びで追う。残りは尾根伝いに先回りをして待ちをかける。
待ちが多いと、クマに臭いを取られて戻り、勢子をかわして逃げてしまうことがある。
- ・リーダーが重要。通り道に人を配置する。クマも明るいところには行かない。待ちは見通しが利くところで待つ。木の上でもよい。決して動かず、ヒグマとの距離が近づいたら無線機も使わない。クマの姿を確認してから、銃を構えて安全装置を外すようにする。勢子は笛などで音を出し、ヒグマがいそうな場所をチェックしながら、足跡を追う。
- ・待ちを通り道に配置する。暗いところ(針葉樹が多いところ)に重点的に配置する。勢子が忍びを兼ねる場合には、基本的に静かに歩く。近くなったら撃たれないように声を出す。
待ち同士的位置が大切。矢先の危険があるので基本的に移動しない。移動するときは無線で必ず連絡する。待ちは立木を前に置いて待ち、絶対に動かない。
いつでも撃てるような準備が必要だが、安全装置をかける。矢先に注意する。

(4) 有害鳥獣捕獲での捕獲技術

ア 安全の確保

有害鳥獣捕獲は狩猟に比べると、人家近くや人の活動区域で銃器を取り扱うことが多くなります。そのため、安全面については一層の注意が必要です。

あらかじめ現場の地形・地物等の状況を把握し、どのような向きであれば安全な発砲ができるか確認しておきます。同様に、巻き狩りや追い出しを行う場合には、周囲に危険が及ばないようにヒグマが逃げる方向を考慮する必要があります。

実際の発砲にあたっては、改めて矢先に気をつけなければいけません。特に、夏場は藪が茂り、見通しが効かなくなります。ヒグマに突然遭遇するようなケースも出てきますが、決してあわてず、きちんとヒグマの姿を確認してから、銃を構えるように心がけます。さらに、ヒグマは他の動物と違って、半矢にしたときの危険が高い動物ですので、確実に仕留められる状況でなければ発砲すべきではありません。

イ 巡回による捕獲

銃器による捕獲では、その使用が日の出から日没に限定されていることに加えて、巡回を行っても、ヒグマを捕獲できる場面に遭遇する機会は限られています。そのため、少しでもヒグマに遭遇する機会を高めるには、まずはヒグマが出没している時間帯を把握することが大切です。

例えば、農地に出没して被害を引き起こすケースでは、朝と夕方にそれぞれ見回りを実施することで、ヒグマが出没しているのが日中あるいは夜間であるのかを知ることができます。また、捕獲熟練者の中には、足跡や食痕などの状況から、どのくらい前に出没していたのかを判断している人もいます。その結果、ヒグマの行動が夜間に集中しているようであれば、わなの使用を検討することも必要です。ただし、夜間に出没している場合でも、実際には夕方から動き始めたり、早朝に山に戻ることも多いので、こうした時間帯に巡回を実施するのも一つの方法です。

巡回の方法にも工夫の余地があります。多くの場合、ヒグマも周囲に警戒して出てきているので、音や臭いなどでヒグマに気づかれないようにすることが重要です。例えば、車を手前に止めておいて静かに歩いたり、風向きを考えて風下から回るだけでも遭遇の可能性は高まります。

【捕獲熟練者の意見】

- ・基本的に朝早く、日の出ぎりぎりに見回りをする。（日の出前発砲は禁止）
- ・早朝と夕方に遭遇することが多い。
- ・人里から遠い畑では昼間に入ることもある。
- ・食べ跡で新旧を判断する。
- ・朝と夕方にまわり、毎回足跡を消しておく。
- ・何回か巡回を繰り返すと出ている時間や出入り口が分かってくる。
- ・車を手前に止めて歩く。近くに行ったら 2 3 分静かにしている。風向きが大切。
- ・複数で来て、わざともう一人が音を出しながら帰る。クマに戻ったと安心させる。

畑の巡回



ウ 待ちによる捕獲

待ちによる捕獲では、前項で述べた出没时间に加えて、出没时间を把握することが重要になってきます。特に、農地での被害など繰り返し出没时间が見られる状況では、ヒグマが出入りする場所が限定されてきます。

出没时间を把握した上で、周辺の見通しのよいところで待ちのポイントを探します。安全面やヒグマに気づかれにくいという点から、地形的に高くなっている場所が理想です。捕獲熟練者の中には、近くの木を利用して、その上で待つ人もいます。

待っているあいだは、音や臭いを出さないようにして気配を消します。風向きも重要です。ヒグマに対して待ちの場所が風上になるようでしたら、気づかれる可能性も高いので、無理をすべきではありません。また、出没时间が予想される時間よりも2~3時間くらい前から待ちの場所につくようにするのがよいようです。

【捕獲熟練者の意見】

- ・ 出入り口から足跡をたどり、待ちのポイントを探す。
- ・ 15時頃から動き出すことが多いので、昼過ぎから待ちをかける。
- ・ ヒグマに人間の臭い感じとられている場合は、臭いの強い草をつけて人間の臭いを消す。
- ・ 出入り口に糸や草の茎を置いて出入りの状況（向き）を確認する。

出入り口に草を置く例



通り道に草を置く

エ 巻き狩りでの捕獲

ヒグマの居場所が分かり、かつ十分な人数がいるときには巻き狩りによる捕獲も有効です。基本は狩猟での巻き狩り猟と同じですが、人の生活圏が近いことや、見通しが悪い状況を考えて、慎重に実施する必要があります。特に、平坦な地形のところでは、勢子や待ちの配置、矢先に十分注意します。

オ 注意が必要な事例

トウモロコシ畑での対応

トウモロコシは農作物の中で最もヒグマによる被害が多い作物です。トウモロコシは被害が発生する時期（8月後半～10月）になると、人の背丈よりも高く成長しており、見通しも悪くなります。また、特にデントコーンの場合、数百メートル四方の大きさの畑もあり、日中でもヒグマが畑の中に潜んでいることがあります。

デントコーン畑の巡回



家畜被害への対応

ヒグマが家畜を襲った場合には、一度に全部を食べず、土に埋めておいて繰り返し食べにくることがあります。ヒグマは餌に対する執着心がとても強い動物なので、このような場所に人が近づくと、餌を守るために襲ってくる可能性があります。

家畜の被害に対応する場合には、ヒグマが襲ってくるかもしれないということを頭に入れて、近づくときには、周りを慎重に確認しながら、風下から近づくようにします。

(5) ヒグマの狙い方

ア 撃つときの条件

ヒグマの場合は、安全かつ確実に仕留められる状況で撃つということが最も重要です。野外ではその時々により、見通しの良さや射撃時の体勢などの条件が異なるため、一概にどの距離で撃てば良いということはありません。ただし、普段から射撃場などで自分が確実に狙える距離を把握しておき、それよりは近い距離でなければ発砲すべきではありません。安全であるからといって、当てる自信のない遠い距離にいるヒグマを撃つようなことは絶対に避けるべきです。

確実に仕留めるという点では、当然ヒグマとの距離が近いほうが有利であり、捕獲熟練者の多くが、「できるだけ近づいて撃つ」ということを述べています。忍びで近づく場合にはどれだけ近づくか、待ちをかけている場合にはどこまで寄せるかということがポイントになります。

しかし、当然、ヒグマとの距離が近いほど、ヒグマに気づかれる確率も高くなってきます。どこまで近づくか、あるいはどこまで寄せるかの判断は、ヒグマの様子をみながらの駆け引きになります。例えば、ヒグマは周りの臭いを感じ取るために、鼻を嗅ぐような仕草をすることがあります。これは、ヒグマが周りを警戒している証拠ですので、このような行動が見られたときには、一旦止まりしばらく様子を見ます。ヒグマがさらに警戒を強めたときには、立ち上がって周囲を確認しようとする場合があります。このときには、すでに気づかれている可能性も高く、多くの場合、ヒグマは逃げてしまいます。

安全を確保するという点では、ヒグマとの位置関係も大切です。最も安全なのは谷を挟んで反対側にヒグマがいる場合です。一方、同じ斜面にヒグマがいて、かつ自分よりもヒグマが上にいる場合は、撃つのを控えるほうがよいでしょう。捕獲熟練者の間でしばしば聞かれる言葉に「上にいるヒグマは撃つな」ということがあります。これは、ヒグマを撃ってもすぐその場に倒れるとは限らず、仮にヒグマが向かってきた場合には勢いがついて危険な状況になるためです。

また、万が一、撃たれたヒグマが向かって来た場合を考えると、ヒグマとの間に遮蔽物があるほうが、安全を確保することにつながります。特に、至近距離で撃つ場合は、太い木を楯にして撃つなどの工夫が必要です。

最後に、最も大切なのは、気持ちを落ち着けて撃つということです。気持ちが高ぶり、興奮している状態では、弾の命中精度も落ちますし、冷静な判断ができなくなります。安定した体勢を確保したうえで、一呼吸おいてから撃つだけの余裕が必要です。

【捕獲熟練者の意見】

- ・近づけて撃つ。自信のある距離で撃つ。
- ・クマの様子を見ながらさらに近づくかどうかを決める。
できるだけ至近距離（50m 前後）で撃つ。
- ・ほとんどは 100m 以内で撃つ。
- ・クマから目を放さないことが大切。両目をあけて撃つ。
- ・下からは撃たない。クマと同じか高い場所から狙う。
- ・自分より上にいるときは撃たない。上にいるものは足元に落ちてくる。
- ・遠いものは撃たない。逃げるクマは撃たない。向かってくるクマを撃つ。
- ・クマとの間に細い木がたくさんある場所を挟んで撃つようにする。クマが突進しにくい。
- ・立木に体や銃をつけて安定した姿勢で撃つ。
- ・自分で確実に撃てる状況で撃つ。息を整えてから立木などに依託して撃つ。
- ・クマが向かってきても大丈夫なように、立木などを盾にして撃つ。
- ・クマが動いているときは、動きを先読みして構える。
- ・どこを狙っているかを覚えていなければいけない（冷静でいること）。

イ 急所と狙い場所

確実にヒグマを捕獲するためには、急所を狙うことが重要です。逆に、急所をそれると、傷を負ったまま逃げられることがあり、この場合には獲物を回収することが難しくなります（最終的に死亡することもあります）。

ヒグマの急所としては、下の2つの部位が挙げられます。

- ・脳や脊髄などの中枢神経
- ・胸部（心臓、肺周辺）

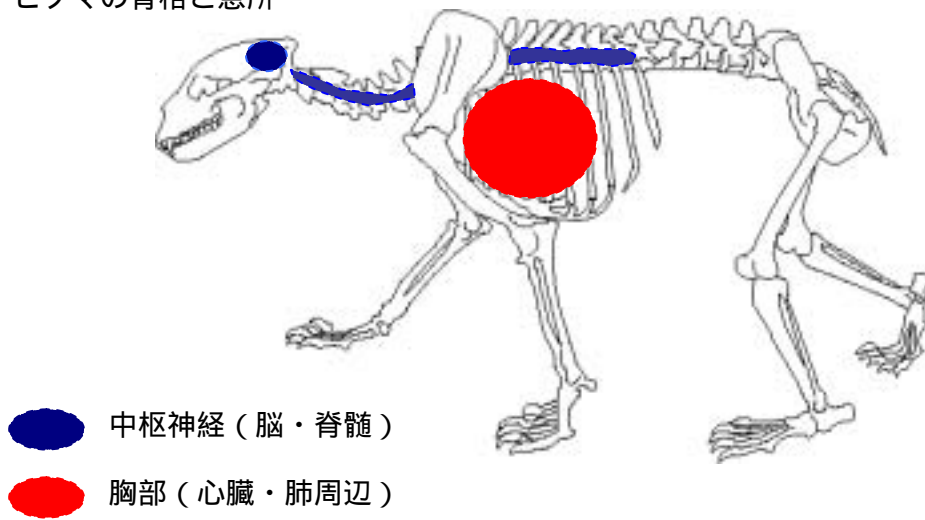
前者の中枢神経については、正しく着弾すればその場に即倒し、動けなくなります。ただし、以下の理由により、よほど条件がよいときを除いてはこの部分を狙うことは避けたほうがよいでしょう。

- ・脊髄が通る首の骨（頸椎）や腰の骨（胸椎、腰椎）は人間の拳ぐらいの太さであり、数センチずれただけで、全く致命傷にならないこともある。
- ・ヒグマは頭や首を動かすことが多いため、着弾箇所がずれる可能性が高い。一方、後者の胸部については、心臓・肺を狙うことが基本となりますが、仮に着弾箇所がずれても、周辺には大血管や胸椎があるため、これらのいずれかが損傷すれば確実に死亡することになります。狙い場所としての範囲が広がるため、心理的にも狙いやすくなります。狩猟者の間では、クマの急所を表す言葉として、「アバラ3枚目」という言葉がありますが、これはまさに胸部の心臓や肺の位置にあたります。

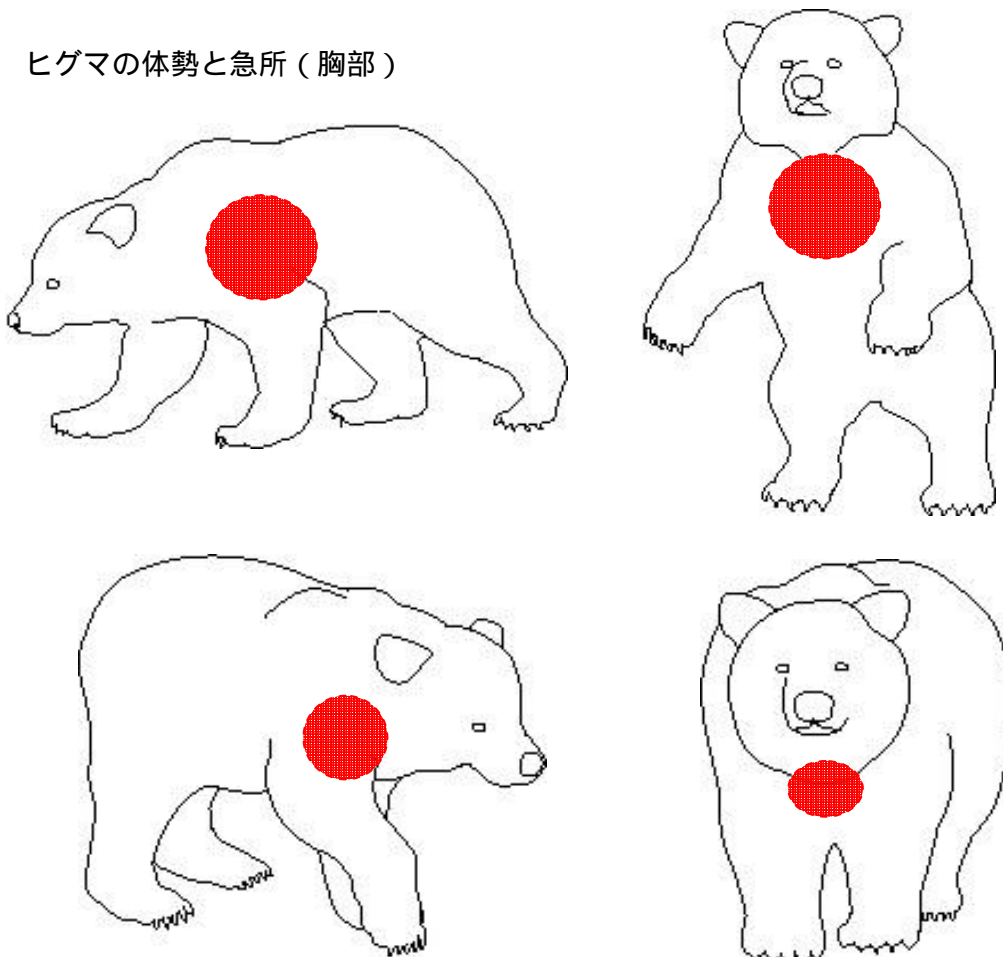
ただし、心臓や肺に着弾したときには即倒するとは限らず、死亡までに多少の時間を要することがあります。そのため、着弾した後のヒグマの動きを十分予測するとともに、安全が確保できる距離や位置から発砲することが大切です。

また、ヒグマがどのような体勢でいるかによって、急所の狙いやすさも変わってきます（次頁参照）。特にヒグマの場合は肉や骨が頑丈ですので、着弾場所や方向によっては、骨にはじかれたり、弾が途中で止まったりして、急所まで到達できないことがあります。例えば、胸部を狙うときには肩甲骨（肩の骨）に注意しなければいけません。この骨は大きく頑丈ですので、着弾の方向によっては弾頭が胸部に到達するのを妨げることがあります。このようなことを防ぐために、貫通力の強い弾頭を使用するののも一つの方法ですが、まずは急所を狙いにくい体勢のときには、決して無理をせず、狙いやすい体勢になるのを待つのがよいでしょう。

ヒグマの骨格と急所



ヒグマの体勢と急所（胸部）



左上：横向きは最も狙いやすい。

左下：肩甲骨に注意する

右上：立っているときも急所を狙いやすいが、立っている時間は短い。

右下：同じ高さからの正面は狙い場所が少ない。頭部は跳弾があるので避ける。

【捕獲熟練者の意見】

- ・クマの骨格を知ることが第一。
- ・クマが立っているときや正面を向いているときはあごの下を狙う。
- ・クマが後ろ向きときは尻尾の付け根を狙う。
- ・横から狙うときは前足を出したときに脇の下を狙う。
- ・クマが真横になっているときが一番狙いやすい。
- ・心臓に当たっても40mぐらい走ってきたことがある。
- ・心臓は体勢によって位置の把握が難しい。立ちあがると下がる。
- ・肺に当たっていれば、のどを鳴らすので、出血していなくても音で分かる。
- ・弾が当たれば声を出す。弾が当たったところを噛むような動作をする。
- ・脳がしっかりしていると動いているもの目掛けて襲ってくることもある。
- ・音がすると顔を背けるので、頭を狙うのはよくない。
- ・頭を正面から狙って弾がはじかれたことがある。
- ・肩骨に当たらないように気をつける。
- ・急所に当たっても逃げるのもいれば、当たり所悪くても倒れるものもある。

ウ 発砲直後の対応と死亡の確認

発砲後は、すぐに次の弾を撃てる準備をしておきます。同時に着弾後のヒグマの動きをしっかり観察していることが重要です。

ヒグマがその場で即倒していれば、急所に当たっている可能性が高いので、しばらく様子を見ながら、二の矢を撃つかどうかを判断します。また、ヒグマが着弾箇所を噛むような仕草をしてその場で暴れまわることがあります。このようなときは、着弾していても、急所を外していることが多いので、すぐに二の矢を撃ちこむようにします。ヒグマが動いて逃げる場合は、できるだけ二の矢をかけますが、動いている状況では弾を命中させるのは難しいので、冷静に狙いを定める必要があります。

仮にヒグマが逃げたとしても、急所に当たっていれば数十メートルの範囲内に、倒れていることが確認できるはずで、急所を外して逃げられた場合やヒグマが視界から外れた場合の対応については、次項を参照してください。

ヒグマが倒れていてもすぐに近づくことは危険です。遠巻きに距離を保ったまま、ヒグマをよく観察できて、なおかつヒグマより高い位置に回りこみます。ヒグマが大きく動くようであれば、頭や首を狙って止め矢を撃ちます。ヒグマに動きがなくなってからも、しばらくは様子を見て時間をおくことが大切です。

狩猟者によるヒグマの事故では、倒れて死んだと思ったヒグマに近づいて反撃されるケースが多くみられます。近づく前には必ず止め矢を撃ち、再度動きがないことを確認してから近づきます。ヒグマに近づくときは、ヒグマよりも高い位置を保ち、上あるいは横から近づきます。決して正面や下からは近づいてはいけません。また、銃はいつでも撃てるような準備をしておくことが大切です。

ヒグマの死亡を確認するのに、捕獲熟練者は下記のようにいろいろな部分に着目しています。初心者はこれらを総合的に判断して死亡の確認をするのがよいでしょう。

- ・手の掌 手の掌が見えていれば死んでいる。
- ・舌 舌が出ていれば死んでいる。
- ・毛が逆立っているかどうか 毛がたおれていれば死んでいる。
- ・爪が開いているかどうか。 開いていれば死んでいる。
- ・目の動き
- ・胸の動き（心臓や呼吸）

【捕獲熟練者の意見】

- ・決して油断をしない。
- ・急所に当たっていれば、当たった瞬間に腰がぐくと落ちる。
- ・着弾後、上に向かって走るクマはダメージが少ない。
- ・倒れてもすぐには近づかない。完全に絶命していることを確認してから十分注意して近づく。
- ・止めを撃ったときに、きちんと当たったかどうかを見ることが大切。
- ・すぐに撃てるような体勢で近づく。遠巻きに見ながら安全、慎重に対処する。
- ・倒れていても後ろから近づく。決して頭（正面）からは近づかない。
- ・近づいてからも棒でつついたり、石を投げてみて反応をみる。
- ・手を前に出している場合には危険。

(6) 半矢のヒグマへの対応

ア 追跡の準備

弾が命中したにもかかわらず逃げたヒグマのことを「半矢」あるいは「手負い」と言います。半矢となったヒグマは、危険を招く恐れがあるので、本来は、半矢のヒグマを出さないことが理想です。しかし、万が一、半矢のヒグマが発生してしまったときのために、その後の対応の仕方をきちんと覚えておくことも必要です。

まず、ヒグマが半矢になってしまった場合は、すぐに追跡をせず、しばらく時間を置くことが鉄則です。すぐに追跡をはじめると、ヒグマも逃げようとするため、遠くに移動してしまい、回収が困難になります。ヒグマも追われていないことが分かれば、逃げるのをやめて、傷を癒すために体を休めます。損傷が大きければ、休んでいる間にそのまま出血多量で死亡することもあります。

追跡を開始するまでの間、可能であれば応援を頼みます。特に見通しが悪い状況やあらかじめ危険が予想される場合には、決して無理をせず、応援が来るのを待ちます。また、時間が遅いようであれば、日を改めて対応するのがよいでしょう。

【捕獲熟練者の意見】

- ・危険なときは一人で追わない。応援を頼む。
- ・追いかけると逃げて見失うことがある。
- ・血の跡があっても、すぐに追うものでない。30分から1時間後に追うべき。
- ・雪が残っているなど条件が良ければあせらず次の日に対応する。

イ 損傷の判断

半矢のヒグマに対応するときに重要なのは、ヒグマがどの程度損傷を受けているかを判断することです。一口に「半矢」と言っても、その状態はさまざまです。急所に命中していて、近くの藪の中で倒れていることもあれば、かすり傷程度でほとんど損傷がない場合もあります。

ヒグマの損傷を推測するポイントの一つは、着弾後のヒグマの動きです。例えば、ヒグマが斜面の上に向かってそのまま走ったのであれば、ダメージは少なく、急所を外している可能性が高くなります。反対に下に向かって動くようであれば、ダメージは大きいと言えるでしょう。

残された血痕も重要な手がかりになります。出血が多ければそれだけ損傷も大きく、出血が少なければ損傷も小さくなります。ただし、胸部の上のほうに着弾したときには、着弾地点では出血がみられず、しばらくしてから（胸に血がたまってから）出血することがあるので注意が必要です。

また、血の色が鮮やかで泡状の場合は肺や気管に、暗く赤色の場合は肝臓や腎臓周辺にそれぞれ着弾している可能性があります。胃や腸などの消化器系に着弾したときは、血液に混じって消化器内の内容物が飛び出すことがあり、この場合は急所を外れていることになるので、その後の対応は慎重にしなければなりません。

半矢になったヒグマは、しばしばササやブッシュの茂みに入ります。このような場所では、ササやブッシュについた血の高さから、傷口の位置を推測することもできます。また、弾が貫通していればヒグマが通った場所の左右に血痕が残ることになります。

雪があり足跡がみられるときには、ヒグマの足取りから得られる情報も重要です。手足に着弾していれば、足取りのパターンが不自然になります。また、ヒグマが休む間隔が短くなってくれば、損傷が大きくなっている証拠であり、近くにいる可能性も高まります。

【捕獲熟練者の意見】

- ・逃げる場合、坂を上っていくかどうかをみる。
- ・血のつく高さや場所で、どの箇所にあたっているか見当をつける。
- ・腹に血がたまることがある。
- ・倒木をまたいだりくぐるときに残る血の場所で、傷口の位置を判断する。
- ・内蔵であればどす黒い血が多く出る。かすり傷程度であれば鮮やかな血が少量になる。

ウ 追跡のときの注意

最初に追跡する者のあいだで、半矢になったヒグマについて、大きさや構成(単独または親子)あるいは損傷の程度などの情報を共有します。特にヒグマの大きさは、撃った人には大きく見えていることが多いので、足跡などで改めて確認します。

追跡は必ず複数で行います。このとき、一人は足跡や血痕をたどり、その後ろに射手をつけて周囲を警戒するようにします。人数に余裕がある場合は、巻き狩りと同じ要領で見切りをして、待ちを配置した上で追跡します。

追跡は周囲を確認しながらゆっくりと進みます。前項での説明にあったように、血痕や足跡の状態をみながら、常にヒグマの状況を判断することが大切です。追われているヒグマが止め足を使うこともあります(次項参照)。ときには川の中をわざと歩いて逃げる場合もあります。また、余力があるヒグマは逃げようとしますが、損傷が大きいヒグマは、あまり動かずに身を潜めていることが多くなります。このように追い詰められた状態のヒグマは最も危険です。特に、次のような場所は、ヒグマが隠れていることが多いので、十分な警戒が必要です。

- ・木の根元
- ・倒木の下
- ・くぼ地
- ・灌木につるが巻きついているところ
- ・岩の陰

すでにヒグマが死んでいる場合には、カラスやキツネなど他の生き物によって、場所が分かることもあります。また、半矢のヒグマの対応には訓練された犬がいると効果的です。

【捕獲熟練者の意見】

- ・半矢になっていたら、茂みの濃いところに入る。
- ・血をたどっていると急にずれることがあるので注意する。
- ・追跡するときは直線的に歩かずジグザグに歩く。
- ・追跡する人の後ろには冷静で腕のよい射手をつける。
- ・半矢のクマも余力があれば逃げるが追い詰められたら逆襲する。中途半端な傷が危険。
- ・死ぬ寸前まで弱っていると丸まっている。そうでなければ顔を起こしたり、にらんでくる。

(7) 注意すべきヒグマの生態

ア 止め足

積雪があり足跡が残るような状態のとき、ヒグマが自分の通った場所を分からなくするために「止め足」というものを使うことがあります。特に、冬眠あるいは休息の場所に移動するときや、狩猟者に追われているときに止め足を使います。

典型的な止め足は、ヒグマが一度歩いた場所をそのまま戻り、脇に跳ぶというものです。戻るときには、そのまま同じ足跡をたどりますので、よほど注意していなければ見逃してしまいます。ヒグマを追っていて、足跡が急に途切れたときは、止め足を疑う必要があります。周辺に足跡がないか慎重に探りながら戻ります。ときには、雪のない場所や倒木の上を歩いて足跡を紛らわせることもあります。

ヒグマが止め足を使うのは、それだけ警戒をしている証拠でもあります。追跡しているときに止め足を使われたのであれば、ヒグマがこちらの気配に気づいている可能性が高くなります。

基本的に止め足は、逃げるために使うものであり、すぐにヒグマが襲ってくるわけではありません。ただし、半矢のヒグマや気が荒いヒグマの場合は、止め足を利用して人間を襲ってくる場合があります。このようなヒグマを追跡しているときの止め足には注意が必要です。

止め足に惑わされないようにするには、追跡しているときに常に周囲を警戒し、目の前だけでなく少し離れた前方の足跡を確認するようにすることが大切です。

【捕獲熟練者の意見】

- ・足跡をそのまま 10m ぐらい戻り、脇に跳ばれた。
- ・止め足を何度もジグザグに繰り返すことがある。
沢を歩いていて急に斜面を上ったり、倒木の上や川の中を歩くのも止め足の一種。
- ・寝るだけなら止め足は少ない。穴に入る前はたくさん止め足を使う。
- ・止め足があったら上に気をつける。
- ・止め足を使われて気づいたらすぐ脇に来ていてうなられた。
- ・大きいクマが使うことが多い。
- ・半矢でなければ止め足で襲ってくることはない。半矢のクマの止め足は危険。

イ 親子のヒグマ

ヒグマの子は生まれてから1年半から2年半の間、母親と行動を共にします。この時期のヒグマの親は子どもを守ろうとする意識が高いため、近づくのは危険です。特に子グマも1歳（明け2歳）ぐらいになると、親から離れて遊んだり、歩いたりすることがあります。また、危険を感じると、子グマを木に登らせて、親がその場を離れることもあります。子グマがいるときには、必ず近くに親がいることを意識しなければいけません。

捕獲熟練者の中には、親子のヒグマは捕獲しないという人もいます。ヒグマの狩猟を継続し、ヒグマという種を存続させるためには、このような意識も大切です。

ただし、被害が発生するなどして、どうしても親子のヒグマを捕獲しなければいけないときには、慎重に対応する必要があります。その場合、必ず親から先に捕獲しなければいけません。子グマを先に撃ってしまうと、近くにいる親が襲ってくる可能性があります。仮に子グマの姿しか見えなくても、撃つのは控えて近くの親を探すようにします。

【捕獲熟練者の意見】

- ・無駄な殺生はしない。子連れは撃たない。
- ・親を先に捕獲する。子がいても撃たないで親を探す。子を先に撃つと親がかかってくることもある。
- ・子が複数のおときは別々に逃げることが多い。
- ・親は絶命しにくいので、安全のためきちんと死亡を確認するほうがよい。

木に登った子グマ



3 箱わなによる捕獲（狩猟で箱わなは使用できません）

(1) 箱わなの構造

ア 形状と仕組み

箱わなの形状には檻タイプのものでドラム缶タイプのもので2種類があります。檻タイプの箱わなは最も一般的に使用されているものです。ヒグマが中の餌を引っ張ると扉が閉まるものやヒグマが踏み板を踏むと扉が閉まるものがあります。

ドラム缶タイプについては、本来はヒグマを麻酔して放逐するために、学術目的の捕獲などで使われるものです。捕獲されたヒグマが暴れにくいので麻酔がかけやすく、ヒグマの爪や歯も傷つきにくい構造になっています。一方で、捕殺を前提とした有害鳥獣捕獲で使用するには、止めさしが撃ちにくいという問題が出てきますので、使用用途によっては一考が必要です。

檻タイプ



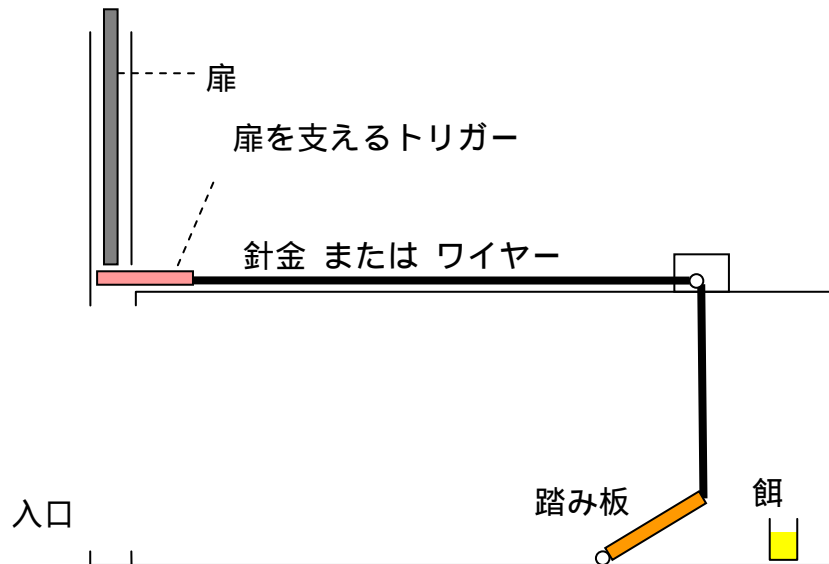
< 捕殺処分が前提 >

ドラム缶タイプ



< 放逐処分が前提 >

箱わなの構造（踏み板式）



箱わな（踏み板式）



踏み板

餌



ワイヤー連結部の金具

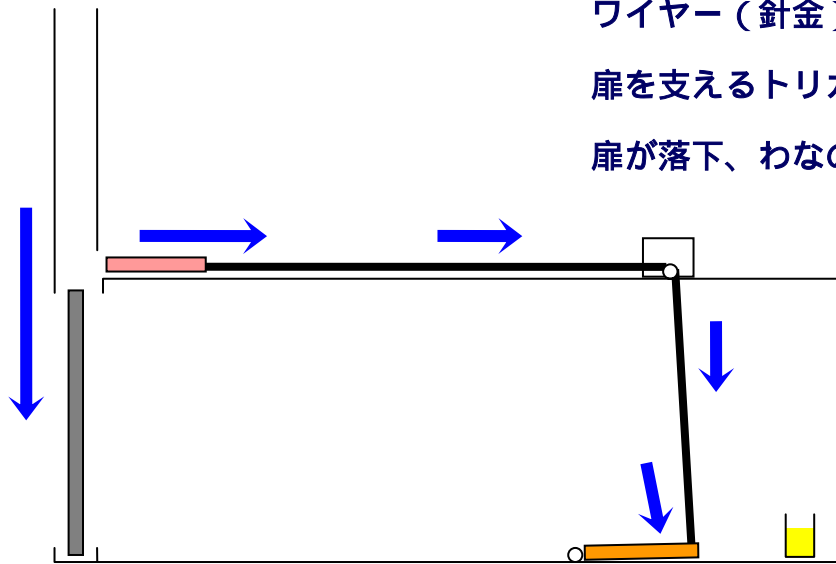
捕獲時の作動

踏み板が 踏まれる

ワイヤー（針金）が引かれる

扉を支えるトリガーが抜ける

扉が落下、わなの入口を閉鎖



捕獲時の状況



イ 大きさ

箱わなの大きさは、地域や個人によって異なります。大きな箱わなのほうが、ヒグマが捕まりやすいという捕獲熟練者の意見もありますが、わなが大きくなるにつれて、運搬や設置の労力、製作費用も大きくなります。

北海道各地の箱わなの大きさを比べてみると、道東・道北地域では比較的大きな箱わなを使用している例が多いようです。小さい箱わなを使用して、大きなヒグマに逃げられた経験を持っている捕獲熟練者が多く、こうした失敗をもとに箱わなを大型化している傾向があるようです。

一方、特に道南地域の捕獲熟練者の中には、捕獲されたヒグマが内部で暴れにくいように、小さなわなを好んで使用している人もいます。

参考までに北海道各地で実際に使用されている箱わなの大きさの例をいくつか示しておきます。

北海道各地で使用されている箱わなの大きさ (単位 cm)

	(幅)		(高さ)		(奥行き)
網走管内	180	×	180	×	350
	150	×	150	×	300
	90	×	150	×	240
	70	×	90	×	240
日高管内	130	×	140	×	300
上川管内	90	×	90	×	250
	75	×	100	×	270
	150	×	150	×	300
渡島管内	100	×	100	×	240
	146	×	132	×	200
	80	×	100	×	200
	90	×	90	×	189

大型の箱わな



小型の箱わな



ウ 格子の構造

格子に使用する鉄筋の太さは3分(9mm)から5分(15mm)が一般的ですが、格子の幅や部材の構造によって箱わなの強度は異なってきます。箱わなの強度を保つ方法としては、平鉄筋を横に渡してその中心に鉄筋を通す構造が最も一般的です。

鉄筋の構造の例



格子の幅が広いとヒグマが隙間から手を出すことになり、場合によっては鉄筋を曲げられて、逃げられることもあります。

ヒグマが格子の隙間から手を出している状況



ヒグマが鉄筋を壊して逃げた例



特に大型の箱わなの場合、重量を軽減するために構造が弱くなりがちですが、捕獲の際の安全性を確保するためにも、箱わなの強度を十分に保つことが必要です。

また、わなの奥の部分については、格子の幅を狭めたり、鉄板を貼り付けるなどしてヒグマに外側から餌を取られないような工夫が施されています。

餌を外から取られないように鉄板を貼り付けた例



エ 安全装置

ヒグマが捕獲された場合に、扉が上がらないようにする安全装置の仕組みが必要です。安全装置の仕組みとしては、ばねで作動するものや振り子構造になっているものがあり、いずれも扉が閉まると作動して扉が上がらなくなります。また、安全装置を複数つけて、扉が落ちる途中で、段階ごとに作動するように工夫したものもあります。

安全装置 左：ばね式 右：振り子式



オ その他の工夫

餌の交換がしやすいように写真のような専用の扉をつけている例もあります。

餌交換用の扉



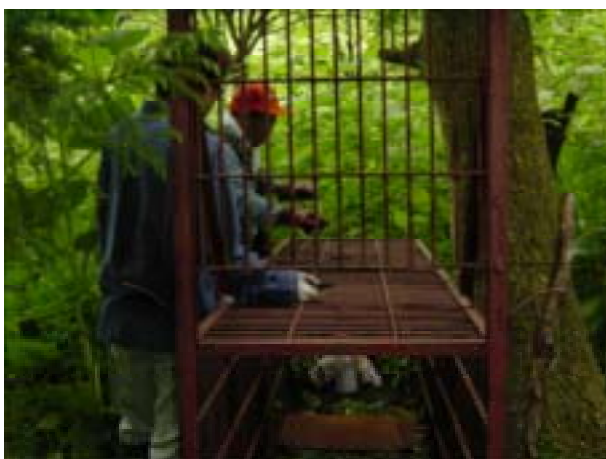
(2) 箱わなの設置例（踏み板式の場合）



- 1 設置場所を決め、箱わなを搬入する。



- 2 箱わなを立木や杭に固定する。



- 3 踏み板をセットする。



4 扉をセットする。



5 わなの周囲に枝や草をかけて隠す(隠さないこともあります)。



6 安全装置を外して、設置完了。

(3) 箱わな設置時の工夫

ア 設置場所の選定

箱わなの設置場所を選ぶときには、ヒグマの生態に即してヒグマを捕獲しやすい場所を選ぶことが重要です。各地の捕獲熟練者が設置場所を選定するときに留意していることを下記に挙げておきます。捕獲熟練者によっては、こうしたことをあまり気にしないという人もいます。また、ヒグマは個体によって性質の違いが大きい動物ですので、全てに当てはまるとは限りませんが、参考にしてください。

【捕獲熟練者の意見】

- ・畑の脇の森林や茂みの中に置くと良い。
- ・畑ではなく、通り道を見つけて少し離れた場所に置くと良い。
- ・畑に出没している場合は通り道を見つけて、通り道に対してわなの入口が直角になる形で置くと良い。
- ・畑に出没している場合は、ヒグマの通り道のうち、出口よりも入口の方に箱わなを設置した方が良い。
- ・デントコーン畑に出没している場合は畑の中に置くと良い。

デントコーン畑の真ん中に設置した例



- ・毎年決まった場所に出没する場合には、ヒグマに警戒されないように、あらかじめわなを置いておくほうが良い。

また、実際の現場では、上記のようなヒグマの性質に係る条件に加えて、

- ・わなを運搬するための車両が入れること
- ・捕獲されたかどうかの確認がしやすい場所
- ・わなが安定する平らな場所

など、捕獲に従事する人間の都合や地形的な制限も出てきます。

さらに、一般の人の中には、興味本位でわなに近づく人もいますので、事故を防止するためにも、人目につきにくい場所を選ぶことも大切です。

イ 警戒されないための工夫

ヒグマは非常に警戒心が強い動物です。捕獲熟練者の中には、ヒグマに警戒されないように、下記のような配慮や工夫をしている人もいます。

【捕獲熟練者の意見 2-1】

- ・ヒグマの出入口を荒らさない。
- ・タバコをすわない。手袋をする。人の匂いをつけない。
- ・人が触れたところなどに匂い消しとして蜂蜜などを塗るとよい。誘引効果もある。

蜂蜜を水で溶かし、噴霧器で匂いをつける



- ・匂い消しとしてヨモギを使用する。
- ・箱わなに木の枝や草をかける。その際に使用する草木はわなから離れた場所から持ってくる。

箱わなに草をかけて隠している例



(続く)

【捕獲熟練者の意見 2-2】

(続き)

- ・横だけでなく入口にも木の枝や草をかけて少し見える程度にする。ヒグマが中に隠れるような感覚にすると良い。
- ・箱わなの中に草を敷いて、周囲の地面と変わらないようにする。

箱わなに草を敷いている例



また、ヒグマの中には、外側から餌を取ろうとするものや箱わなを倒して餌を取ろうとするものもいますので、杭や立木を利用して番線などで固定しておく必要があります。

ヒグマに倒された例



杭を用いた固定の例



侵入防止の看板やロープの設置



また、「わな」本体には、以下の項目を記載した標識を付けます。

- ・住所
- ・氏名
- ・電話番号
- ・鳥獣捕獲許可年月日
- ・許可番号
- ・捕獲目的（有害鳥獣捕獲）
- ・許可の有効期間

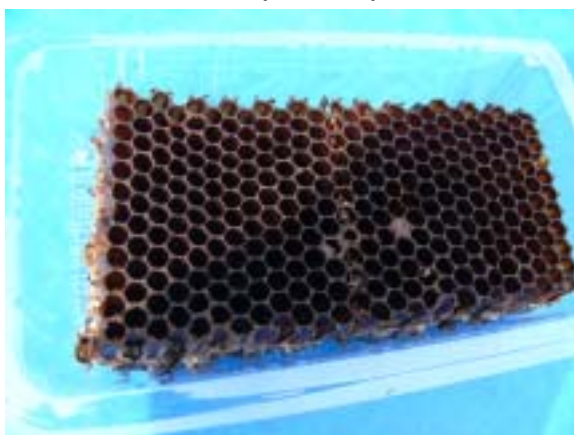
(4) 箱わなの餌

ア 餌の種類

- ・ 蜂蜜（雑蜜、アカシア蜜、そば蜜、蜂の巣、蜜を絞った後の蜂の巣など）
- ・ 蜂蜜に混ぜたもの（蜂蜜＋米糠、蜂蜜＋ドッグフードなど）
- ・ サケ、マスなどの魚
- ・ エゾシカ
- ・ イカゴロ（イカの内臓）
- ・ 各種果物
- ・ ドッグフード
- ・ 被害にあった作物

箱わなに使われている餌の例

蜂蜜（蜂の巣）



イカゴロ



被害にあった作物（スイカ）



近年では、道東地域を中心に、有害鳥獣捕獲などでエゾシカ肉が入手しやすくなっており、ヒグマの箱わなの餌として使用する例が増えています。蜂蜜よりもエゾシカ肉の誘引効果が高いという捕獲熟練者も多くいますが、地域によっては、ヒグマが肉の味を覚えて、家畜の被害が広がる恐れがあるとして、肉類の使用を控えているところもあります。

イ 餌の置き方と誘引の工夫

ヒグマを効率的に捕獲するために、捕獲熟練者は餌の置き方や誘引に下記のような工夫をしています。

【捕獲熟練者の意見 2-1】

- ・餌が水に濡れないように、箱を二重にする。

二重にした餌の容器の例（木の板のふたをして紐でしばる）。



- ・警戒心の強いヒグマに対しては、餌の味を覚えさせることが重要である。最初はわなの外に餌を置き、餌についたら、徐々にわなのほうに近づけていく。わなの中でも手前から奥へと餌をずらしていく。わなの中でも餌をじぐざぐに置くようにするとヒグマが誘引されやすい。
- ・わなの奥、踏み板の前、わなの外の3ヶ所に餌を置く。わなの外の餌は量を多めにして、ヒグマに味を覚えさせる。外に餌を置くことで、奥の餌に執着して周りを掘るなどの行動を防ぐ。一度餌を食べれば、警戒心を弱めて、奥の餌を食べるようになる。

餌の置き方の例（わなの奥、踏み板の前、わなの外）



（続く）

【捕獲熟練者の意見 2-2】

(続き)

- ・誘引用の餌を高い木にぶら下げる。匂いが広がり、他の動物にも取られにくい。蜂蜜の場合は、ペットボトルに3分の1ぐらい入れて、上部にスリットをつけて、周辺の木の上に吊す。
- ・わなを置く前に穴を掘り、シカの内臓などを埋める。そのうえにわなを置き、地面から腐敗臭がするようにする。その際、クマが周りからは掘れない場所に埋める。
- ・餌にエゾシカ肉を使うときは、最初はわなの外におき、少し腐ってきたら、中に入れてワイヤーにつなげる。少し腐敗するぐらいが良い。
- ・餌に蜂箱を使う時には、蜂が出入りするように巣材も残すようにする。
- ・警戒心が強いクマの場合は、最初に餌につくまでは手袋をする。

誘引用の餌の設置例



ウ 他の動物対策

箱わなでは使用する餌によっては、他の動物が誘引されることがあります。それらによる餌の消費や箱わなの誤作動を防ぐために、下記のような工夫があります。

【捕獲熟練者の意見】

- ・トリガーを深めに差し込み、少し引いただけでは作動しないようにする。
- ・キツネ対策として、入口から少し入ったところに、細かい魚網を全面に張りつける。ヒグマは魚網を破って入ってくるが、キツネを防ぐことができる。
- ・猛禽類に餌を取られることと、直射日光での餌の腐敗を防ぐために、わなのまわりをコンパネで囲う。
- ・サケやシカ肉はナイロン製の土嚢袋に入れる。ハエがつかず、交換も楽になる。
- ・大きいわなを使用して餌を高いところに吊るし、キツネなどが取れないようにする。
- ・誘引用の餌（エゾシカ肉の場合）は大きい塊を使うと、他の動物に引っ張られない。
- ・蜂蜜の場合、スズメバチが集まってくるので、金網でふたをする。

メモ ~ヒグマはどのような餌を好むか~

ヒグマは学習能力が高く、餌に対しての執着が強い動物です。そのため、一度味を覚えた餌には強く固執しますが、反面、味を知らない餌については、全く興味を示さないこともあります。ヒグマにも個性があるので餌の好みが違うという捕獲熟練者の意見は、このようなヒグマの習性に基づくものです。

廃棄された牛乳の捨て場にヒグマがついたときに、蜂蜜やサケを餌にしても捕まらなかったが、乳製品であるバターを置いたところすぐに捕まった事例、番屋の冷蔵庫を荒らしていたヒグマを捕獲するのに、缶ジュースを置いたところ捕まった事例など、ヒグマが同じ餌に固執することを示した話は各地で見られます。被害を引き起こしているヒグマを捕獲するために、ヒグマが誘引されているものを餌に使うのも一つの方法です。

一方で、ヒグマと人の軋轢を根本的に解決していくためには、このようなヒグマの習性を考慮し、ヒグマが農作物など人為的なものの味を覚えないように、ヒグマの出没の可能性の高い農地では電気牧柵を設置する、農業系廃棄物を農地周囲に捨てない等、誘引物を管理することが重要です。

(5) 箱わなの見回りと止めさし

箱わなの見回りは、毎日実施し、できれば一般の人が活動をはじめる前の早朝に見回るようにします。安全対策として、扉が閉まっていることが、遠くから分かるような仕掛けをつくることもあります。このことは、わなには必要以上に近づかず、人間の匂いを残さないことにもつながります。

箱わなの扉が閉まっていることを確認したときには、必ず銃を所持してわなに近づくようにします。特に親子のうちのどちらかが捕まったときには、周りに別のヒグマがいる可能性もありますので、周囲に気を配り、慎重にわなに近づきます。

止めさしは、急所である首を狙うようにします。頭や心臓も急所になりますが、絶命するまでに時間がかかることがあります。

格子の幅が狭いわなでは、格子の間から銃身を差し込むようにして撃ちます。ヒグマが動き回ることもありますので、ヒグマの動きが止まるのを確認して、慎重に狙うことが大切です。

止めさしの撃ち方



格子の幅が広いわなでは、そばに近づくのは危険ですので、少し離れた場所から、狙うこともあります。特にライフルを使用する場合には、弾が抜けて跳弾が生じる恐れがありますので、奥の格子にも注意して狙うようにします。また、周囲に人がいる場合には必ず物陰に隠れてもらうようにします。

(6) 箱わなでの失敗例や危険な事例

捕獲熟練者が経験してきた失敗例や危険な事例を以下に挙げておきます

【捕獲熟練者の失敗例など】

- ・ヒグマが箱わなを外からゆすったため、扉が閉まり、わなごと転がされた。その後、固定して再設置したら捕獲できた。
- ・格子の間から手を入れられて、鉄筋を曲げられた。鉄筋を太くして、格子の幅を狭くした。
- ・ヒグマが入口に体当たりして、入口が曲がってできた隙間から逃げられた。
- ・踏み板をまたがれて餌だけ取って逃げられた。
- ・ヒグマが餌を引っ張ったときに、餌が踏み板に引っかかり、逃げられた。
- ・わなが小さくて、扉がヒグマに当たって逃げられた。その後、大きいわなを設置して捕獲した。
- ・安全装置をセットするのを忘れていて逃げられた。
- ・安全装置がうまくかからず、逃げられそうになった。止めを撃つときに危険だった。
- ・止めさしを真横から撃ったのに、口から弾が抜けたことが2回あった。理由はわからないが、骨に当たって変化したかもしれない。
- ・作業中に扉が落ちて出るのに苦労した。その後はストッパーとして扉の下に木を差し込むようにしている。
- ・わなが傾くぐらいに周りをほられた。その後は、わなの下に垂木を敷くようにした。
- ・親子のうち子がかまったときに、近くで親がうなっていた。

4. くくりわなによる捕獲（狩猟でくくりわなは使用できません）

(1) くくりわなの使用にあたっての注意

くくりわなによるヒグマの捕獲は、箱わなよりもさらに大きな危険を伴います。そのため、有害鳥獣捕獲で使用できるのは、箱わなでの捕獲が困難な場合など特別な場合に限られます。

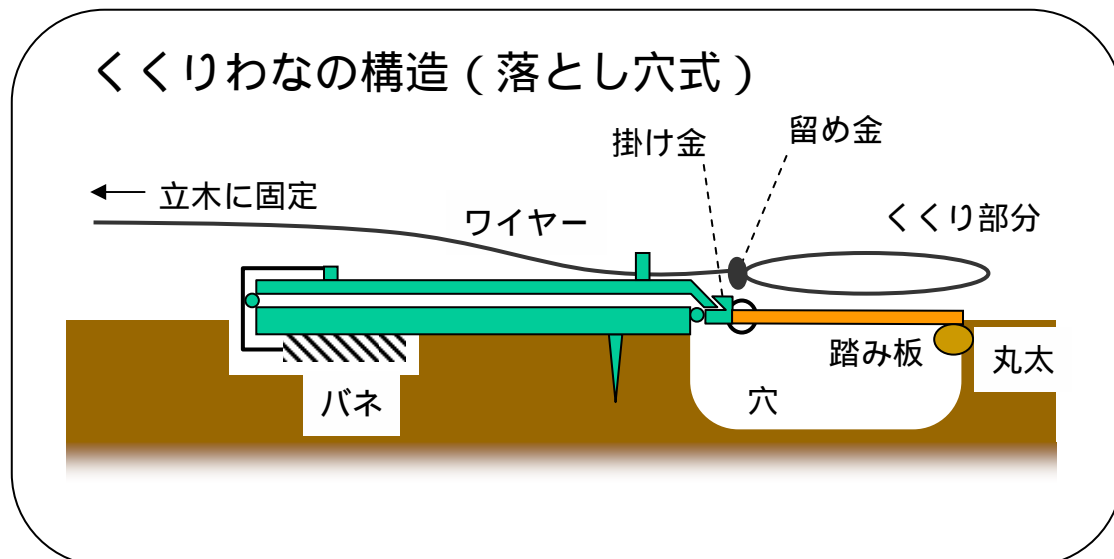
くくりわなで捕獲されたヒグマは手足の一部をワイヤーで固定されただけの状態になりますので、ヒグマによる事故が起きないように安全面については十分な配慮が必要です。設置場所については、一般の人が決して入らない場所を選び、周囲には看板を設置して注意を促します。

また、ワイヤーで手足を確実に固定できるように、使用する機材の仕組みを理解し、設置方法についても工夫をする必要があります。特にワイヤーについては丈夫で信頼できるものを使いましょう。捕獲されたヒグマによる事故がおきないように、見回りの頻度や実施方法、止めさしについても、細心の注意を払わなければいけません。

これらの条件の一つでもそろわないときには、くくりわなによる捕獲を実施すべきではありません。

(2) くくりわなの構造

ア 仕組み



【捕獲熟練者の意見】

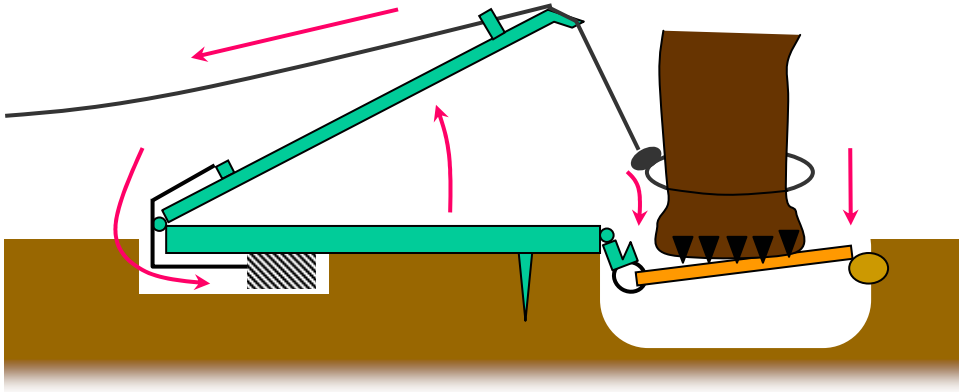
- ・ わなのアームの長さが長いほうがよい。ワイヤーの収縮長が伸びるので、くくりの輪を大きくできる。市販のアームが短いわなでは大きなヒグマを捕獲するのは難しい。
- ・ 踏み板を小さいものにすることで、誤作動が少なくなる。また、掘る穴も小さくて済むので、ヒグマに警戒されにくい。

踏み板を小さくしたくくりわな



捕獲時の作動

踏み板が 踏まれる
掛け金が外れる
バネによって 跳ね上げ装置が 作動
ワイヤーが引かれて くくり部分が
収縮する



捕獲時の状況



【捕獲熟練者の意見】

- ・直径 6mm 以上のワイヤーが望ましく、これ以下の径では切れる可能性がある。
- ・一般販売のワイヤーは、芯にナイロンや麻が使われていて強度が不十分である。また、ワイヤーの素材の鉄は固いと切れてしまうので、軟鉄のほうが良い。
- ・4分（直径 12mm）のワイヤーをほぐしたものが、丈夫で使いやすい。
- ・捕獲されたヒグマが暴れるうちに、ワイヤーがよじれることがある。

ワイヤーのよじれ
金具も曲がっている。



- ・頑丈なより戻しをつけてワイヤーのネジ切れを防ぐ。
- ・捕獲によって少しでも傷んだワイヤーは次回から使用しない。

(3) くくりわなの設置例

ア 前足のくくりわな



- 1 設置場所を決め、ヒグマの足の位置に深さ10cmほどの踏み板大の穴を掘る。



- 2 穴の位置に合わせて本体をセットする。



- 3 踏み板をセットする。



- 4 出没しているヒグマの足の大きさに合わせて、ワイヤーをセットする。



- 5 反対側のワイヤーを立木に固定する。



- 6 わなに土や葉をかけて隠す。近くの枝や丸太を利用して、ヒグマがわなを踏みやすい状況を作る。

- 7 安全装置を外して、設置完了。

イ 後ろ足のくくりわな（実際の現場ではなく、庭先で再現しています）



- 1 ヒグマが立ち上がって届く高さに、餌を固定する。周辺にも餌を置き、ヒグマに餌の味を覚えさせる。



- 2 餌を狙ったヒグマがちょうど立つ位置にくくりわなを設置する。木から約 30cm ぐらい離れた場所。



- 3 木にワイヤーを固定する。
(3)設置時の工夫の項参照



- 4 ワイヤーの内側に小枝を刺しておき、ワイヤーを誘導して、足首の上にかかるようにする。

誘導用の枝



- 5 ヒグマが餌に対して、正面から近づくように、周りに枝などの障害物を置く。

- 6 安全装置を外して、設置完了。

(4) くくりわな設置時の工夫

ア 固定の方法

ワイヤーはなるべく太くてしっかりした立木に固定します。

【固定方法の例1】

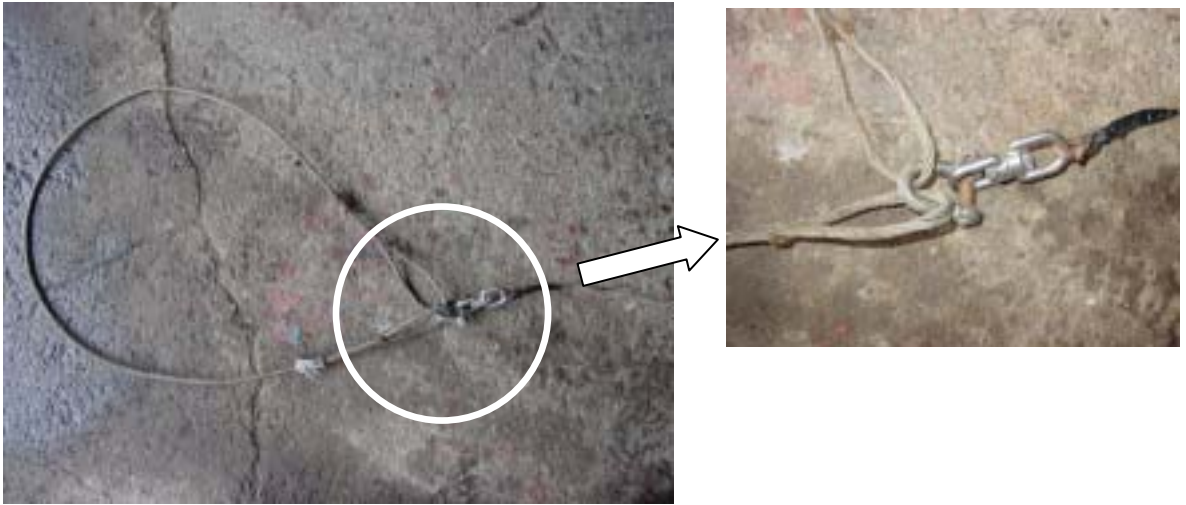


ワイヤーがゆるまないように、D型金具などできっちりと固定します。あまりきつく巻きつけると、ヒグマが暴れたときにワイヤーが固定されて、切れる恐れがあるので、ゆるめに巻きつけます。

この捕獲熟練者の場合、近くに細い木が密生して生えているような場所では、ワイヤーを長めにしておきます。捕獲されたヒグマが暴れまわるうちに、周りの木が絡まり、最終的には身動きが取れなくなります。



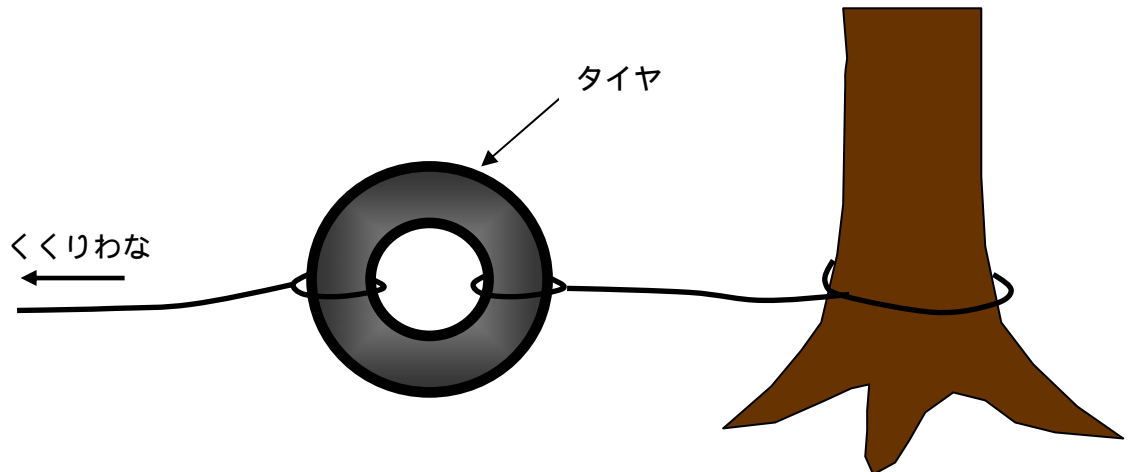
【固定方法の例 2】



後ろ足くくりを行っている捕獲熟練者の固定方法です。ヒグマが木の周りを回っても、ワイヤーがからまないようにしています。また、途中により戻しをつけて、ワイヤーのねじれを防止しています。

【固定方法の例 3】

ワイヤーが長くなる場合には、タイヤで中継して、ワイヤーに力がかからないようにする。



イ 設置場所の選定

くくりわなの設置場所を選ぶ上で一番大切なことは、一般の人が決して入ってこない場所を選ぶことです。そのうえで、最もヒグマが頻繁に利用している通り道を探します。

ヒグマの通り道



【捕獲熟練者の意見】

- ・警戒心の強いヒグマの場合、出没を繰り返す中で、何箇所も出入り口を作るので、早い段階でわなをかけるほうがよい。
- ・被害箇所に近づくとつれて、出没経路が増えてくるが、少し離れたところでは経路が絞られるので、そうした場所を見つけて設置するとよい。
- ・箱わなの餌にはついてはいるが、警戒して中には入らない個体に対して、箱わなの回りにくくりわなをかけて捕獲した。
- ・安全対策として同じ場所に2個かけて、足が2本かかるようにするのが望ましい。
- ・設置場所を高くする、あるいは地面が高くなっているところに設置する。
- ・わなの手前に丸太を置き、丸太をまたいだところにわなを設置する。ただし、丸太が大きすぎると丸太に足をかけてしまうのでよくない。

ウ 警戒されないための工夫

ヒグマは非常に警戒心が強い動物です。捕獲熟練者の中には、ヒグマに警戒されないように、下記のような配慮や工夫をしている人もいます。

【捕獲熟練者の意見】

- ・手袋をして、わなには素手でさわらない。
- ・できるだけヒグマの通り道を荒らさないように少人数で手早く作業をする。
- ・雨の日の前に作業をすると匂いが消えて良い。
- ・匂い消しとして、人が触れたところに蜂蜜を塗るとよい。誘引効果も得られる。
- ・オイル缶にスプーン 1 杯の割合で苛性ソーダを水に溶き、ワイヤーを煮る。その後、ナラの木の皮を煮出したもので、再度煮ると良い。ただし、煮すぎるとワイヤーが腐食してしまうので注意が必要。

エ 安全面の配慮

一般の人が近づかないように周囲に看板を設置します。また箱わなと同様に住所や氏名等を記載した標識を付けます。

(5) くくりわなの見回りと止めさし

くくりわなについては、必ず毎日早朝に見回りを実施します。また、日中に出没する可能性がある場所では、夕方にも実施します。

くくりわなを見回るときには、必ず銃を所持し、ヒグマが捕まっているものとしてわなに近づきます。実際にヒグマが捕まっているときには、人間が近づくとヒグマがうなり声を出したり、わなの周辺の草木が荒らされていたりするので、多くの場合はヒグマが捕まっていることに気付きますが、わなにかかったばかりで、静かに隠れていることもありますので、十分な注意が必要です。

また、ヒグマが捕まっている場合には、ヒグマが飛び掛ってくることもあります。そのため、あらかじめわなを固定した立木の位置とワイヤーの長さを正確に把握しておきましょう。その際、後ろ足にわながかかっていて、予想以上にヒグマが飛び出してくることもあるので注意が必要です。また、親子のうちのどちらかが捕獲され、周りに別のヒグマがいる可能性があることも頭にいれておきましょう。

こうした危険を考え合わせると、くくりわなの見回りについては、銃を所持した人が2名以上で実施するのが望ましいと言えます。

止めさしについては、急所である首を狙うのが最も有効です。ただし、ヒグマが動いていて正確に当てるのが難しいこともあります。弾が当たってヒグマが倒れても、すぐに近づくのは危険です。再度止めを撃ち、しばらく様子を見て、動かなくなったのを確認してから、十分に注意しながら近づきます。

くくりわなでヒグマが捕獲されたときの周辺状況



(6) くくりわなでの失敗例と危険な事例

捕獲熟練者が経験してきた失敗例や危険な事例を以下に挙げておきます。

【捕獲熟練者の失敗例など】

- ・ワイヤーの止め具が折れて逃げられた。
- ・ワイヤーがねじれて切れた。
- ・ワイヤーが切れそうになっていた。
- ・わなの直径が小さくて大きなクマでは足にかからなかった。
- ・くくりわなを太い丸太に繋げておいたら、丸太ごと引きずりまわしていた。
- ・ヒグマが木の根元に隠れていて、近づいたらいきなり飛びかかってきた。
- ・3本の指だけがワイヤーがかかっていた。
- ・カモフラージュとして、ワイヤーの上に草をかけておいたら、雨降りの後ワイヤーに絡まり、はねあがりが遅くなってヒグマに逃げられた。
- ・大雨のときに落とし穴に土が流れ込み、踏み板が落ちなくなっていた。

5 . 捕獲後の処理

(1) 解体方法

ヒグマの解体の方法はいくつかありますが、ここでは代表的な方法を簡単に紹介します。

皮を剥ぐ

ヒグマを仰向けにして、股間部から首に向けて、体の中心に沿ってナイフを入れ、皮を剥ぎます。同様にそれぞれの手足の皮を剥ぎます。手首・足首の関節で手足を外します。

腹部・胸部を開く

胃や腸に傷をつけないようにして腹部を開きます。胸部は、肋骨の根元をなたやのこぎりを使用して開くのがよいでしょう。

内蔵を取り出す

首から食道を取り出し、そのまま外に引き出します。横隔膜は骨に沿って切り取り、残りの内蔵を引き出します。肛門部は肛門の回りをくり抜くか、なたで骨を割って取り出します。

クマの胆(胆のう)は肝臓の脇についています。ナイフで慎重に剥がし、管をひもできつく縛って切り取ります。

メモ ~クマの胆について~

ヒグマを含むクマ類の胆のう(クマの胆)は、古くから医薬品として珍重されてきました。このクマの胆は、クマ類の捕獲が容易ではないことや一頭から採れる量が少ないことから、高価に売買されてきました。このため、胆のう目当てに捕獲が行われているという、根強い批判が一部にあります。

実際、胆のうの経済的価値の高さから、クマ類の乱獲や密猟が国際的に問題となり、現在、ヒグマを含むクマ類の国際的な取引はワシントン条約で規制されています。

(2) 捕獲の報告と試料の提出

北海道では、ヒグマを捕獲した際に、捕獲したヒグマの大きさや捕獲場所の報告と年齢や栄養状態などを調べるための試料提供の協力をお願いしています。これらの情報や試料は、現在のヒグマがどのような状態にあるかを知るための貴重なデータとなります。

ア 捕獲の報告

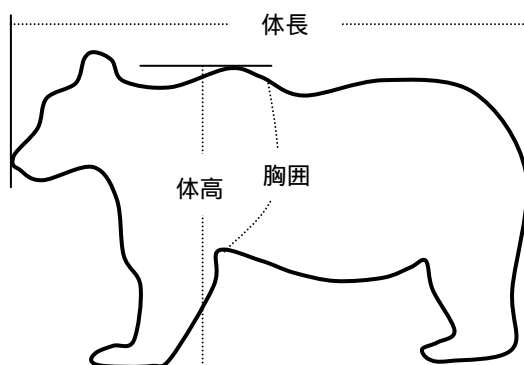
ヒグマを捕獲した場合には、「ヒグマ捕獲票」(次頁)により、「いつ、だれが、どこで、なにを」捕獲したかを最寄りの支庁に早急に報告するようお願いしています。報告に当たり、ヒグマの大きさの計測は下図の方法により行ってください。

計測の実施方法

体長：体を伸長させ、鼻端から肛門までの長さを測定する。

胸囲：脇の下で胴体の周囲を測定する。

体高：前足の手首の下から肩の盛り上がりまでの長さを測定する。



イ 試料の提出

回収をお願いしている試料は下記の通りです。試料の採取方法については、93頁を参考にしてください。

【 回収する試料一覧 】

種 類	内 容	調査する内容
下顎第4前臼歯	歯根部を含めた歯全体(1本のみ)	年齢
胃	内容物も含めた全体	食性(食べ物)
大腿骨	1本(左右のどちらか一方)	栄養状態
腎臓とその周辺脂肪組織	1塊(左右のどちらか一方)	栄養状態
肝臓	5cm×5cm×5cm角1つ	遺伝的多様性
メスの生殖器	卵巣1対から外陰部にかけて一式	繁殖状態(産子数等)

採取したヒグマの試料は、期日指定(土日、祝日を除く。)の冷凍宅急便にて、着払いで下記までお送り下さい。

なお、試料には必ずヒグマ捕獲票の写しを添付するとともに、複数の個体の試料を送付するときには各個体分が混同しないよう、個体毎にひとまとめにするなどご配慮をお願いします。

試料の送付先

北海道環境科学研究センター 自然環境部野生動物科

〒060 - 0819 札幌市北区北19条西12丁目(電話：011 - 747 - 3570)

提供頂いた資料の分析結果は、翌年度の5月頃、支庁を通じて、関係市町村などにお届けしています。

ヒグマ 捕 獲 票

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

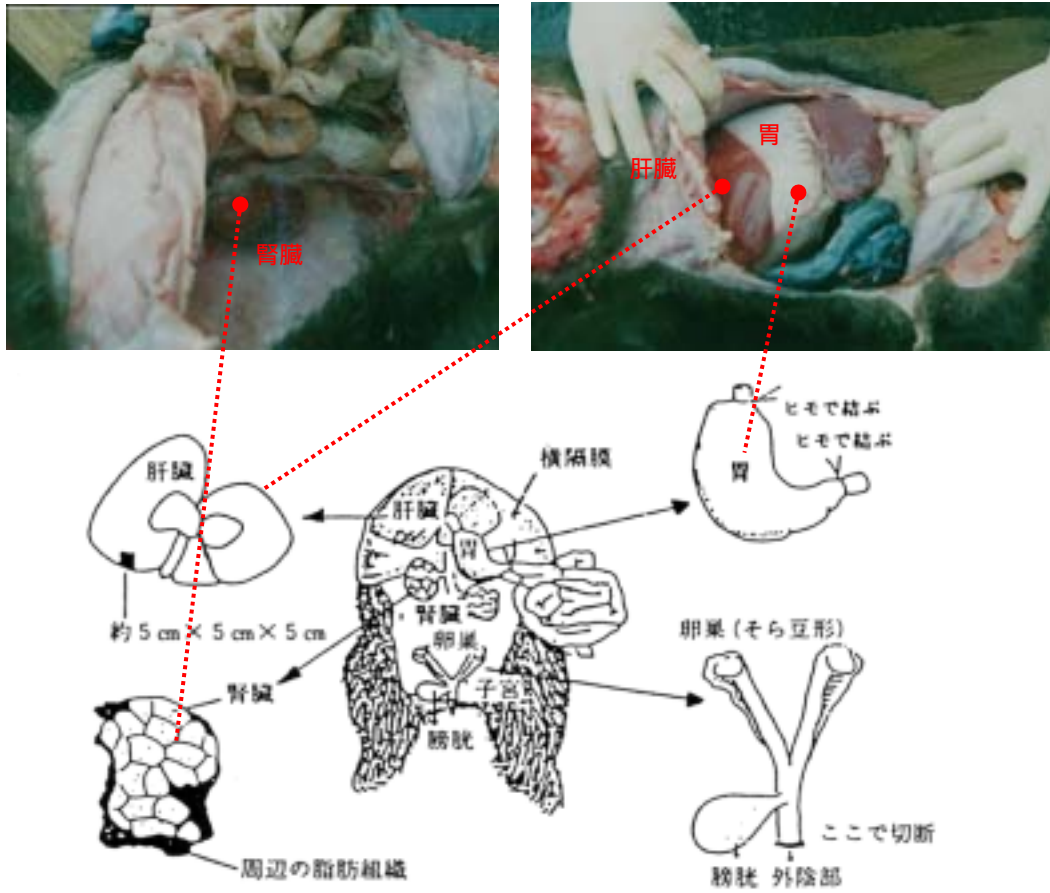
有害駆除・狩猟

(空欄に必要事項を記入するか、該当するものに をつけてください)

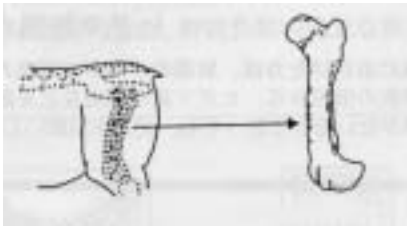
個体番号					ヒグマ試料回収セットの番号を記入														
捕獲者代表	<住所> 市 町 字																		
住 所	〒 郡 村																		
氏 名	<氏名> ほか 名																		
	<電話> ()																		
	猟友会名	支 部			部 会														
捕獲年月日	平成	年	月	日	午前・午後	時	分	頃											
捕獲場所	市 町 字					メッシュ番号													
及び	郡 村																		
メッシュ番号																			
クマの性別	オス・メス	推定年齢	歳	体重	実測・推定		(kg)												
捕獲区分	出グマ・穴グマ			猟 法	銃・箱ワナ・くくりワナ														
外部計測	体長	(cm)	胸囲	(cm)	体高	(cm)													
	ヒグマの体を伸張させ、鼻端から		脇の下で胴体の周囲の長さを測定。		前足の手首の下から肩の盛り上														
	肛門までの長さを測定。				がりの上までの長さを測定。														
メスグマを捕獲したとき																			
1) 仔を連れていましたか (はい・いいえ)																			
2) 何頭連れていましたか (1頭・2頭・3頭・不明)																			
3) 仔の年齢は (当歳・明け2歳・明け3歳・不明)																			
4) 仔のうち何頭を捕獲しましたか (1頭・2頭・3頭)																			
* 捕獲した仔の個体番号(仔を捕獲した場合)																			
<table border="1"> <tr> <td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td> </tr> </table>																			
採取部位	試料を採取した部位を で囲んでください																		
	1. 下顎第4前臼歯 2. 胃 3. 大腿骨 4. 腎臓とその周辺脂肪組織																		
	5. 肝臓 6. メスの生殖器(卵巣と子宮)																		
備 考	製品化予定の有無(有・無)																		

- 注) 1. この捕獲票は、ヒグマの捕獲があった場合は、1頭につき必ず1枚提出してください。
 2. 捕獲個体から採取した試料を送付する場合は、試料回収セットに添付してください。
 3. 2頭以上捕獲した場合は、おそれいりますがこの様式をコピーのうえご記入ください。
 4. 狩猟で使用する様式では「猟法」の「箱ワナ・くくりワナ」を取消し線で消去して使用してください。

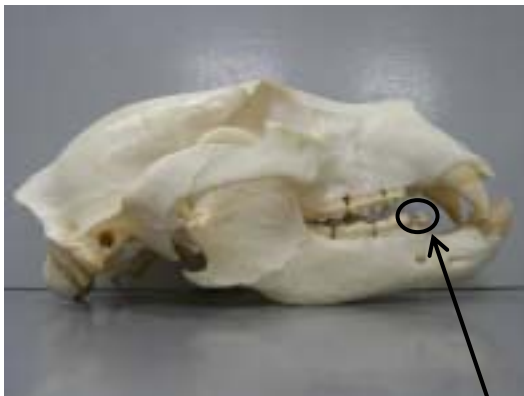
試料の採取方法



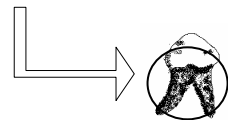
* 大腿骨はこの部分の骨を採取します。



* 回収した試料はこのようにビニール袋に入れます



円内の歯根を壊さないでください。



注意!

この部分に年齢をみるための層
がありますので、この部分がない
と年齢を調べられません。

この歯(下顎第4前臼歯)を採取します

(3) 製品化と登録

捕獲したヒグマを剥製、敷物等にする場合には、別途、製品化登録の申請をする必要があります。申請は捕獲後 30 日以内に最寄りの支庁に提出します。

クマ類製品化登録申請書

北海道知事様

年 月 日

申請者 氏 名 (印)
 (捕獲者) 住 所
 生年月日
 職 業
 狩猟免許 (種類/番号)

クマ類製品化の登録を受けたいので、下記のとおり申請します。

記

1. 製品化の種類	剥製 (全体) ・ 敷物 (全体) ・ トロフィー (頭部のみ)		
2. 捕獲区分	狩猟 ・ 有害鳥獣駆除	狩猟者登録番号 (または) 有害駆除許可証番号	
3. 捕獲日時	平成 年 月 日 午前・午後 時 分頃		
4. 捕獲方法	銃器・その他 () (ワナ設置年月日 : 平成 年 月 日)		
5. 捕獲位置	市 町 郡 村		
6. 捕獲個体情報	性別 オス ・ メス	推定年齢 約 歳 (数え年)	体重 約 kg
7. 譲渡予定	有 ・ 無	譲渡先氏名・住所	

(留意事項)

- ・ 捕獲クマ類 1 頭につき一登録申請とする。
- ・ 捕獲後 30 日以内に登録申請するものとする。
- ・ 捕獲個体の製品化は、剥製 (全体)、敷物 (全体)、トロフィー (頭部のみ) のいずれかとし、該当するものに をする。
- ・ 捕獲区分は、狩猟、有害鳥獣駆除のいずれかに をする。
- ・ 申請書裏面には、捕獲物全体の写真を添付し撮影年月日を記入すること (日付入りプリントの使用可)。

協力者一覧

本テキストを作成するにあたり、次の方々にヒグマ捕獲時の注意事項などについて、聞き取り調査をさせていただきました。皆様には快く調査を協力していただき、感謝申し上げます。

銃器関係取材協力者一覧（順不同）

北海道猟友会函館支部	西村孝氏
〃	谷内田博氏
北海道猟友会八雲支部	中村慶邦氏
北海道猟友会旭川支部	矢部福二郎氏
北海道猟友会士別支部	原子一男氏
北海道猟友会富良野支部	松本安又氏
北海道猟友会斜里支部	高木寿一氏
〃	八木沢武志氏
北海道猟友会北見支部	加藤国憲氏
北海道猟友会浦河支部	浦川芳美氏
〃	山中卓氏
〃	横浜武康氏
〃	荒木義広氏
北海道猟友会日高中部支部	的場正行氏
有限会社沖銃砲火薬店	沖慶一郎氏
- 写真提供協力（順不同） -	
北海道猟友会函館支部	西村孝氏
NPO 法人 EnVision 環境保全事務所	早稲田宏一氏

わな関係取材協力者一覧（順不同）

北海道猟友会函館支部	小澤成司氏
北海道猟友会八雲支部	中村慶邦氏
北海道猟友会森支部	青山久雄氏
北海道猟友会江差支部	大川房義氏
〃	都築俊雄氏
〃	羽原啓市氏
北海道猟友会富良野支部	高橋萬氏
北海道猟友会名寄支部	山本三喜男氏
〃	高木忠氏
北海道猟友会北見支部	加藤国憲氏

北海道獵友會紋別支部	田村清氏
北海道獵友會遠輕支部	田中榮氏
〃	上戸忠男氏
〃	佐藤博司氏
北海道獵友會浦河支部	日田宣光氏
北海道獵友會日高中部支部	新冠分会
北海道獵友會沙流川支部	福崎義勝氏
- 写真提供協力（順不同） -	
北海道獵友會富良野支部	高橋萬氏
北海道獵友會名寄支部	高木忠氏
北海道獵友會日高中部支部	新冠分会
NPO 法人西興部村獵區管理協會	伊吾田宏正氏
NPO 法人 EnVision 環境保全事務所	早稻田宏一氏

(以上)

ヒグマ捕獲テキスト

発行 平成18年7月
編集 北海道環境生活部環境局自然環境課
〒 060-8588
札幌市中央区北3条西6丁目
TEL 011-231-4111 (代)
FAX 011-232-6790
